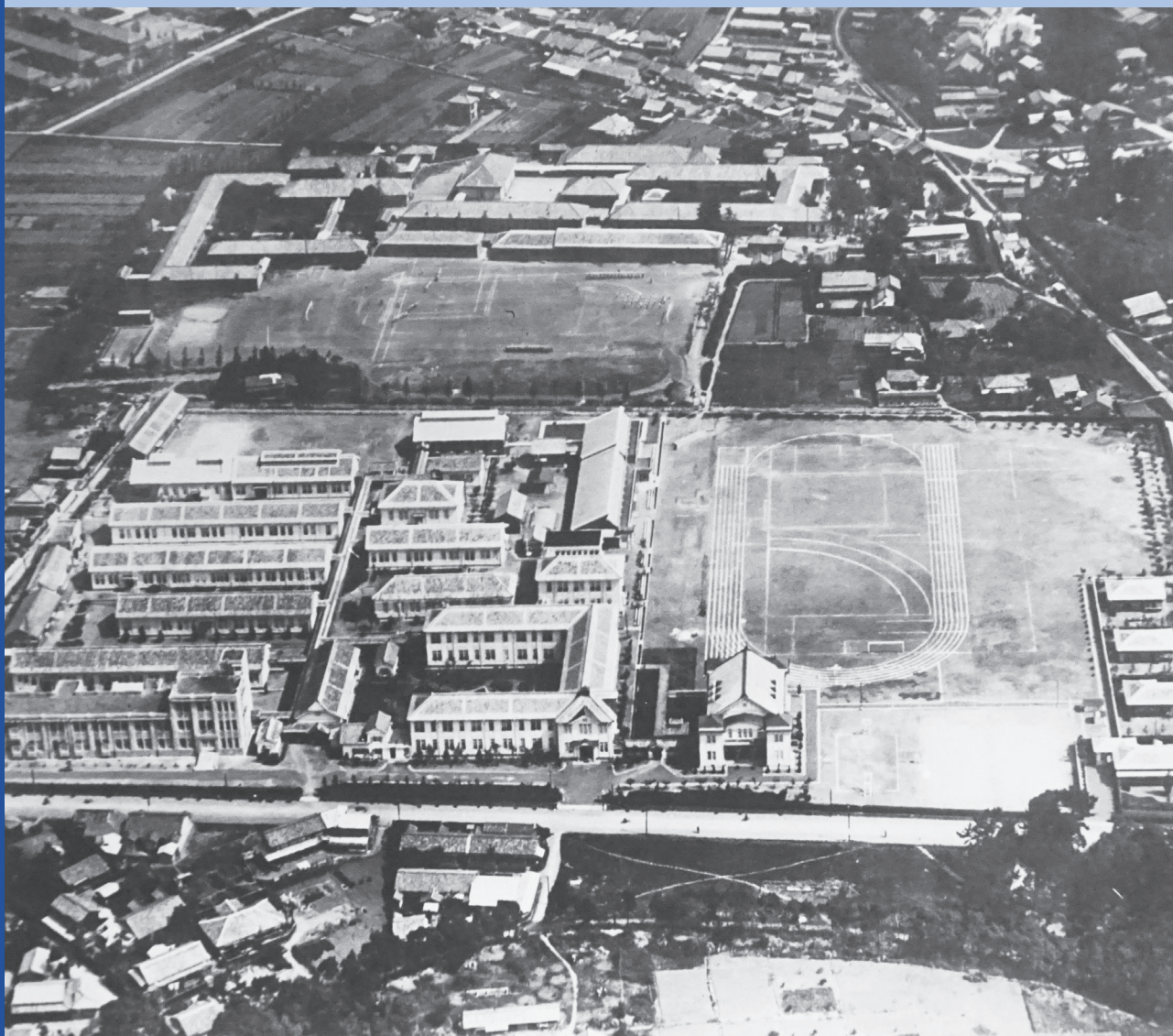


第1章

浜松高等工業学校から 浜松工業専門学校へ

1930年 全景

1931 浜高工アル



第1節 浜松高等工業学校

1 | 浜松高等工業学校の開校



関口壮吉 初代校長(1922-1925)
1926浜高工アル



体育展覧会
1926浜高工アル

▶ 関口初代校長の自由啓発主義

1918(大正7)年、当時の原敬内閣は高等教育拡充方針を決定し、全国8校であった高等工業学校(修業年限3年で、5年制中等教育修業後に進学)を6校増設する方針を決定し、そのうち一校が静岡県内に設置されることとなった。県内では、静岡市・沼津市・浜松市が名乗りをあげ、工業基盤が固く政治力も強い浜松市が誘致競争の勝者となった。文部省の直轄学校であるが、106万円の経費の半額が地方負担であり、浜松市も10万円の寄付をした。学校位置は市内広沢町に決定、初代校長に文部省督学官関口壮吉が任ぜられた。1923(大正12)年3月、機械・電気・応用化学の3学科(1学年各学科定員40人)の浜松高等工業学校が開校し、第1回の入学試験が実施された(表1-1)。この時の試験は、数学・物理・英語など同じ試験科目を2回行い、平均点を採用した。

試験のみならず、関口校長の教育方針はユニークだった。当時の知育偏重の風潮の中で、高等工業教育には知識だけでなく体力の充実、徳性の涵養が重要であるとして、武道・運動競技など体育を重視し、他校の授業時間が週39～42時間であったのに対し、本校では授業を36時間に制限し、水曜午後を主として体育(その他自由学習)の時間として開放した。徳育の基本姿勢は、学校のエデュケーション・ネットワーキングや生徒心得などを作らず、初期は制服も定めず(生徒に募集して制服・制帽を決定)、校門の出入りにも制限を加えなかった(守衛を置かず、市民は誰でも出入り自由)ことに象徴されている。授業に関しては、当初は生徒自身の自己規律を重視して、出席を取らず(のちに学生管理による出席評価)、そもそも成績考査のための試験さえ実施されない自由教育主義であった(最初の卒業生には

入学年次	機械学科			電気学科			応用化学科		
	募集定員	志願者	入学許可	募集定員	志願者	入学許可	募集定員	志願者	入学許可
1923(大正12)年	40	84	44	40	118	44	40	50	44
1924(大正13)年	40	158	50	40	199	44	40	134	43
1925(大正14)年	40	146	43	40	155	44	40	96	42
1926(大正15)年	40	190	42	40	349	40	40	135	34
1927(昭和2)年	40	222	41	40	287	38	40	120	37
1928(昭和3)年	40	545	38	40	574	37	40	319	40
1929(昭和4)年	40	302	40	40	399	41	40	198	38
1930(昭和5)年	40	660	42	40	584	40	40	336	38

表1-1 浜松高等工業学校開校初期の入学試験状況

出典：『静岡大学工学部五十年史』より

備考：志願者・入学許可者とも、「無試験検定」(学校長や機関推薦の植民地出身生徒)を含む
当初の試験科目は、数学・物理・化学・国語・英語

1928年入試より試験科目を数学(代数及び幾何)、英語(英文和訳)に改定

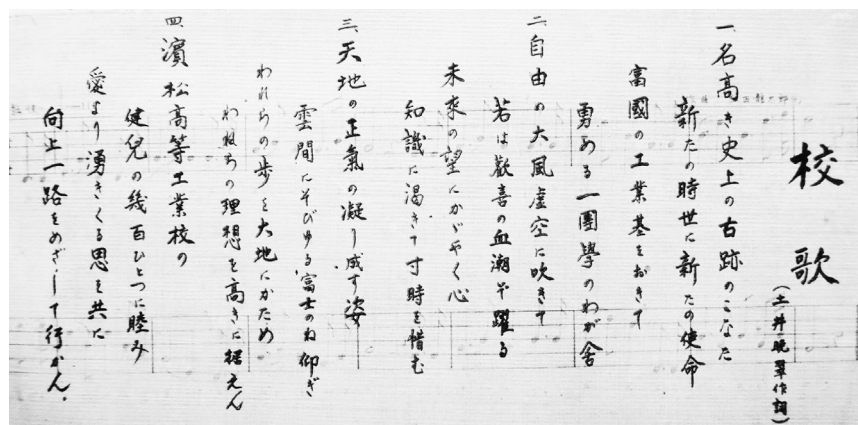
成績表がなかった)。

教育方針として掲げた「自由啓発主義」は、学徒を自由で自治的な環境に置き、個性の伸長を促し、以って教育の理想を実現しようとした基本理念を示していた。

なお、浜松高等工業学校は、開校と同時に中等学校の教員を養成する臨時教員養成所を併設した。数学科と物理化学科の2学科であるが、1931(昭和6)年に一旦廃止され、1940年度に復活した。

思ひ出
席澤のほとりに、椎の木が三度實を結び三方
原の曠野に、蜜柑が三たび色づく時、移り行く
梅が香の、名残りと共に、今我等は、懐かしの
母校を後に、慕はしき沼松を捨て、實社會の荒
浪に採れなければならぬ。
三とせの昔、東より、將た西より、理想と抱負
に、若人の心を躍らせながらも、期せずして、
愛の教に育まれ、自由啓発の大自然の恵みを
受けた時、吾等は此の大先輩者に對して、どん
なにか感謝した事だつたらう。
學校の大方針は確立し、平和な氣分が、校の内
外に溢れ、端々として校門を、往來途々學徒の
群は、永劫へと連なり、工業立國の道にいそし
むのである。
今校門を辭去するに際して、走馬燈の如く吾等
の胸裡に映じくるものは何か……。
或は春尚淺き頃、濱名湖の水も漸く、温まらん
とする時、辨天の松蔭に、骨て磚し思ひ出も
あつたであらう。又時を得て佐鳴湖に走り、心
行くばかり櫓を操つた愉快さも忘れないだらう
が、天守閣に登りて、うたた往昔に思ひを馳せ
古人の霸業に感ぜし、遙か瀕の怒濤を眺めては
青年の意氣を誇つたに違ひない。
春は逝く、初夏の緑はこよなくうれしい。天龍
川畔に釣を垂れ、三方原の散策に時を忘れたの
も、その頃であらう。間もなく休暇がやつて來
る。實習に、研究に、或は海に山に、暫くは散
つて行く。秋は來た、運動の季節である、讀書
の時である。秋はよい、東海の秋は殊によい。
秋より冬にかけて、どんなにか日の短きを恨み
夜の長きを喜んだらう。都田の茸狩り、クラス
會の夜、さては製圖室での駄ぼら、すべては忘
れられない記憶である。終らんとして思ひ出は
尙盡きず。唯健在で他日を約さう。

浜松高等工業学校機械科第1回卒業アルバムより



浜松高等工業学校最初の校歌

1931浜高工アル



製図室

1926浜高工アル



講義風景

1926浜高工アル



校門

1931浜高工アル



音楽会

1926浜高工アル



校舍全景

1926浜高工アル



校内選手権大会優勝盾1929年

浜松工業会蔵



川口徳三 第2代校長(1925-1932)

1931浜高工アル

▶ 校友会とスポーツ奨励

開学した1923(大正12)年10月、在校生全員を会員とする校友会が設立され、運動部・学芸部・常務部が置かれた。運動部は、各種武道から陸上競技・水泳・登山、テニスやサッカーなども含まれる。学芸部は、映画、展覧、雑誌編集、あるいはこの時代を象徴する演説・講演会活動を行った。常務部は、校友会の庶務・会計に関わる部門であるが、記念祭や学内の旅行を分掌した。設立当日、早速、第1回学内競技大会が開催されたことは、校友会設置の第一目標が運動奨励にあったことを物語っている。さらに、同年11月、早くも第1回陸上競技大会が開催された。競技は、100～1500メートル走各種とハードルやリレーを含むトラック競技、幅跳・高跳・棒高跳・砲丸投から円盤・槍投に及ぶフィールド競技など全学徒・職員が参加するスポーツ競技会だった。明治以来の日本では、娯楽や余興を含む運動会が盛んに催されたが、浜松高等工業学校が特に目指したのは新興の近代スポーツの大会であった。近代スポーツ奨励は、浜松市民にも開かれており、1925年11月、3日間にもわたる体育展覧会が催され、学内運動部ごとの写真やメダル・優勝旗・トロフィーなどによる各種運動紹介の展示は市民を魅了した。

1925年に第2代校長に就任した川口徳三は、1928年5月の「校内選手権大会」に際し、種目の総得点が最も多い学級に優勝盾を授与し、1年間これを保持することにした。この時の12種目は、駅伝競走、剣道、柔道、野球、庭球、陸上競技、水泳、蹴球、排球、籃球、卓球、角力であった。

▶ 校友会誌『佐鳴』と同窓会・同窓会誌

校友会の発足は学生の自主的活動力と校内の結束を高め、校友会学芸部は、1924(大正13)年3月、開学後わずか1年にして、学生自身の手で校友会誌創刊号を発刊した。第2号は同年12月であるが、この時校友会誌は『佐鳴』と号された。揺籃の「小鳴」(佐鳴湖)が、いずれ天下を聳動させる「大鳴」(遠州灘)に成長するとの期待を込めた命名であった。

同窓会は、1927(昭和2)年の第2回卒業生を送り出したのを機に設立された。同窓会誌の創刊は、2年後の1929年8月である。

翌年1930年2月には、学内に「消費組合」も設立されている。文具・書籍雑誌だけでなく制服などの被服や食料品や運動具類まで及ぶ、大学生協の先駆けの事業体であった。

2 | 高柳健次郎のテレビジョン開発

▶ 最初の「イ」の字が映るまで

米国WH(ウェスティングハウス)社が1920(大正9)年にラジオ放送を開始すると、時をあわせて世界でテレビジョンの実験研究が盛り上がった。1921年に

東京高等工業学校(現在の東京工業大学)電気科を卒業した高柳健次郎は、1923年にテレビジョンを研究題目と定めた。1924年、浜松高等工業学校に助教授として赴任し、関口校長に着任と同時にテレビジョン研究の許しを願い出た。関口校長は大変驚いたが、研究の重要性を認め特別の配慮で研究を許可し、電気科、機械科、応用化学科、物理教室等の教員も研究を応援した。

その頃のテレビジョンの研究には機械的方式と電子的方式があり、当時大部分の研究者は機械的方式を研究していた。高柳はテレビジョンの将来を考えて独り電子的方式を採用した。その後テレビジョンは電子的方式によって完成、実用化されデジタル化されて現在に至っている。1924年の終わりに撮像管(光電管)および受像管(ブラウン管)を考案発明し、撮像管は浜松高等工業学校の研究室で試作し、受像管の試作は東京電気株式会社(東芝)が担当した。最初、雲母板の上に墨で書いた「イ」の字を送る実験をしたが、なかなか受像が安定しなかった。その後約1年程度の研究で「偏向」ならびに「同期」方式を発明考案して1926年12月25日に初めて安定した「イ」の字を受像管の蛍光面の上に映し出すことに成功した。

▶ テレビジョン実用化 ◀

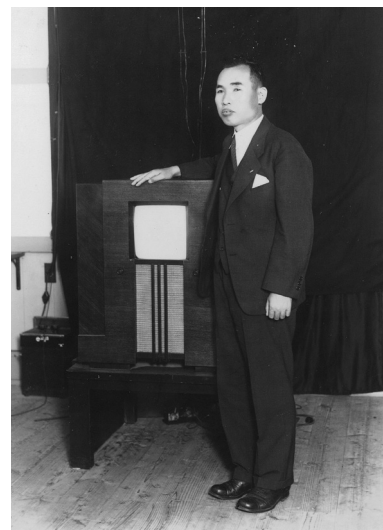
1929(昭和4)年秋には高真空多極ブラウン管を発明して、一挙に、明るくて大きな映像を映し出すことができるようになった。この受像管を用いて1930(昭和5)年5月5日、昭和天皇の静岡県巡幸の際に、浜松高等工業学校に天皇の来校を仰ぎ、テレビジョン実験が行われた。テレビジョンの研究が公式に認められ文部省から多額の研究費が支給され、さらに研究二棟が完成した。加えて日本放送協会(戦後のNHK)から毎年多額のテレビジョン研究費が支給され積極的にテレビジョンの研究が行われた。1931年の中頃、映像信号増幅器の研究の進展で画素1万個のテレビジョン開発に成功することができた。しかし、機械的走査のカメラではこれ以上精細な画像を送像できず撮像管の研究を再開したもの、それまでの方式での高精細化は感度が著しく低下し撮像が困難になった。1930年に積分方式という光を電気に変換して蓄積し読み出しのタイミングと独立させる方式で、高解像度と高感度を両立する方法を考案発明し、1935年には初めて戸外の景色を自由に撮像することが出来るようになった。こうして1936年春には全電子方式のテレビジョンが浜松工業高等学校で完成した。

1937年、テレビジョンの継続研究は、日本放送協会技術研究所(東京府北多摩



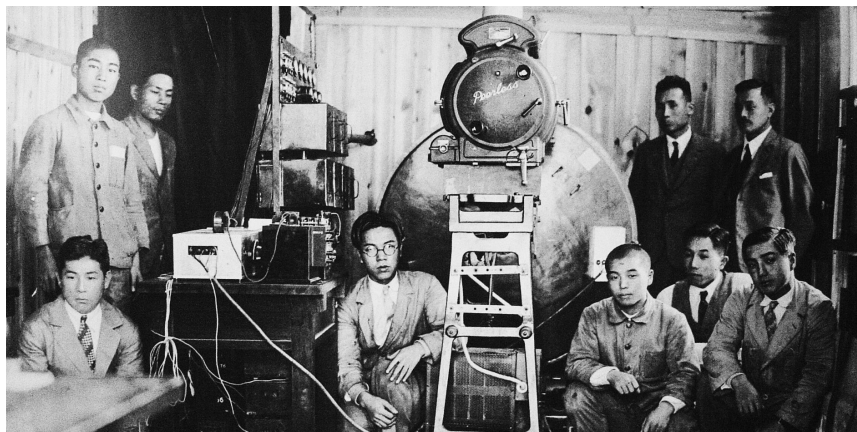
「イ」の字 1926年12月25日

高柳記念未来技術創造館蔵



テレビジョンと高柳健次郎教授

1944浜高工アル(航空)



1万画素達成当時のニポー円板送像機と関係者

高柳記念未来技術創造館蔵

郡砦村)に移行し、1940年の東京オリンピック(戦時により中止)に向けてテレビジョン放映の準備を進め、1939年5月に日本放送協会においてテレビジョンの実験放送が開始された。戦後、米軍によりテレビジョン研究が一時禁止されたが、その後、手先が器用な日本人に電子工業は適している点に加え、テレビジョンはセット以外にも材料から放送局、俳優や脚本まで裾野が広いことから、高柳健次郎はメーカーを横断したプロジェクトを構築し、その結果テレビジョン産業は我が国の一大産業として花開いた。



設立当時の電視研究室全景1932



電研50年史

当時の電視研教職員一同

電研50年史

Column

浜松高工時代のテレビ研究

日本ビクター KK 取締役

浜松工業会特別会員

高柳健次郎

1. テレビの研究動機

私は大正10年に東京工大の前身である蔵前の東京高等工業学校電気科を卒業した。卒業に際し、中村博士から「君達は卒業したら世の中の為になるものを開発せねばならぬ。しかし今流行しているものをやっても駄目だ。10年、20年後になくてはならぬものをじっと辛抱して勉強せよ。西洋の諺に、Fortuneの神は、前髪はふさふさしているが、後頭部は禿げている。後からいくら追いかけてもすべて捕まらぬ。前に廻って待伏して前髪を捕まえねばならぬ。」と諭された。

私は深く感銘して、よし何かよい題目をみつけ、それをじっと勉強して、きっと世の中のお役に立つものを開発しようと決心した。

さて私は卒業後神奈川県立工業学校の教諭になって横浜に住んでいたが、一心に研究題目を見付ける様努力した。英米独仏其他の国の電気専門雑誌を講読したり、汽船の電気見習ひとなって米国へ渡航を企てたり、大学の諸先生を訪問して教えを乞うたり、横浜にきた電気関係の外人の技術者を訪ねたり、無線会社の先輩の御指導を受けたりして探したが、思

う様な題目が見つからなくて大いに焦っていた。

当時はまだラジオがない時代である。米国では1~2年前から、ラジオというものが始まっている噂があった。しかしラジオは既に近く日本でも実用化されるが、既に多数の先輩が勉強中であるので、自分がやるには遅い。私はラジオの次の問題をやりたいと考えたのである。

大正12年の初夏、即ち関東大震災の直前に神は私に大きなチャンスを与えて下さった。私はフランス語の学習のために、横浜の山下町のフランス領事館に通った。その帰途、居留地の外国の本屋の店頭で、偶然、フランス通俗雑誌に未来のテレビの漫画を見たのである。ラジオの次は写真電送、其次はテレビだ。私は初めてテレビのあることを知って感激した。そしてこれを一生かけて勉強、開発しようと決心した。

2. 浜松高工へ着任、テレビ研究の許可

テレビ研究には、よい指導者と研究設備が必要だ。私は大学とか研究所への転任を希望して、東京工大の山本教授をお願いした。

山本教授は、早速其友人であり且つ私の先輩にあたる中島友正教授に話をして下さり、大正13年4月に新設開校の浜松高工に助教授として転任する様になった。

さて、大正13年5月、初めて校長室に関口校長を訪ねて、着任の御挨拶をした。

関口先生は「君は何故浜松高工に希望したのか?」と質問された。私は「浜松は私の郷里であるばかりでなく、実はテレビの研究をしたいので」と申上げた。「テレビとは何んだ」と問われ、私は「無線遠視法と言って遠くの景色や人物が居乍らに見える方式で、東京の歌舞伎座の芝居が、浜松で家庭に居乍ら見える様になるものだ」と御説明した。

関口先生は、大変驚き、「そんな馬鹿な事が出来るものか」と叱られたが、思い返されて、「そんな事が出来る様なになれば大変な事だ。一体研究費はいくら位かゝるのか」と問われた。

私は恐る恐る「2,000円か3,000円あれば」と申上げたところ、中沢会計主任を呼ばれ、文部省よりの予算の事を尋ねられ、「その位の金なら文部省にかけ合って、出して貰う様にすると仰って、テレビ研究を許して頂いた。

当時関口校長は生徒には自由啓発と運動を奨励され、職員には研究開発、学問の勉強を奨励されていた。それで私の様な未熟な若者の言う事を取り上げて、テレビ研究に着手出来た訳で大変幸せであり、まことに有難い事と思っている。

(『佐鳴』第48号 1973年)

第2節 戦時から戦後へ

1 | 浜松高等工業学校の発展

▶ 日中戦争下の学校組織

1936(昭和11)年5月、創立以来教頭職にあり、その後文部省視学官を務めた安達禎が第4代校長として着任した。1932年に創立10周年を経た浜松高等工業学校は、1937年3月の第12回卒業式の時点で、開校以来、機械・電気・応用化学3学科の下、1354人の卒業生を輩出していた。同年7月、日中戦争が勃発し、工業力増強が急がれ産業界の技術工員の不足を補うために、8月に高等工業学校16校で工業技術員養成科(修業年限半年間)が設置され、浜松高等工業学校に電気科が設置された。

戦時色が強まると技術系の学生・工員の必要性はさらに大きくなり、全国での高等工業学校の拡充に合わせて、1938年度に本校入学者の増員が行われ、機械科90人、電気学科(電気科の拡充)55人に増員された。また日本放送協会の依頼によって技術員養成の無線工学専攻科(定員30人、修業期間約半年程度)も新設された。

かねてから浜松高等工業学校は、電気学科卒業生の三分の一が従事している弱電工学分野の学科と、精密測定機、精密工作機械などの分野の学科の設立を申請していたが、1939年度に通信工学科と精密機械学科が増設されて本科5学科となり、夜間課程修業年限2年間の浜松機械技術員養成科も新設された。1940年になると文部省は中等学校教員養成のための臨時教員養成所の拡充を決定し、浜松高等工業学校に浜松臨時教員養成所(修業年限三カ年、物理化学科、数学科は1941年度設置)を再設置した。



校旗

1944浜高工アル(航空)

Column

1940年、校旗がなかった浜松高等工業学校に、校旗が作られた。紀元2600年記念行事の一つで、御真影奉安殿設置とあわせた、戦時色が深まる中での制定であった。

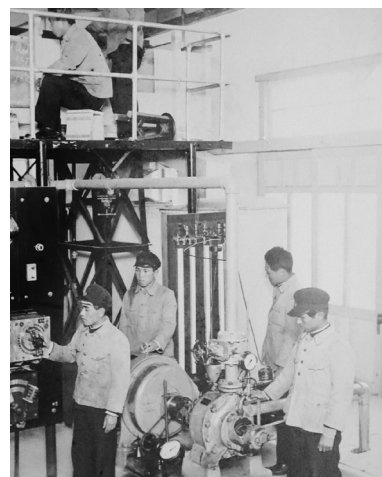
Column

3年間修業し、年度末の3月に卒業できたのは、1940年度の第16回卒業生(1941年3月卒)までである。第1回(1925年度)以来の卒業生総数1855人の主な就職別をみると、技術者公吏362人、会社工場技術員1178人、大学専門学校・工業学校教員などの学校教員83人である。死亡108人という数は、戦争の影響も示しているようか。この年の記録には兵役が示されていないが、前年までの卒業者の内訳には、兵役59人とある。



旋盤

1936浜高工アル(機械)



水力実験

1936浜高工アル(機械)



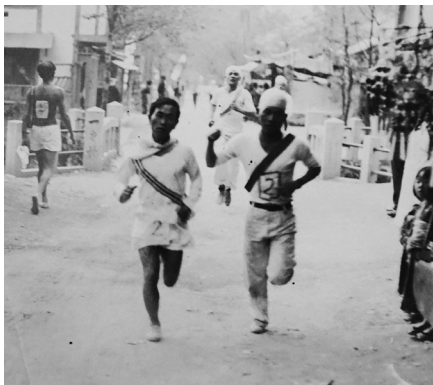
駅伝競走

1936浜高工アル(機械)



駅伝競走

1936浜高工アル(機械)



駅伝競走

1936浜高工アル(機械)



写友会

1936浜高工アル(機械)



食堂

1938浜高工アル(電気)



内燃機関研究会

1936浜高工アル(機械)



映画部

1936浜高工アル(機械)



工場の人々

1936浜高工アル(機械)



野外教練

1936浜高工アル(機械)

▶ 太平洋戦争下の学校組織 ◀

日中戦争開戦から4年、航空機製作技術者の養成が急務となった1941(昭和16)年の3月、本校でも航空機製作の技能修得を目指す航空工学科が増設された(志願者数1217人、80人入学)。太平洋戦争が始まり燃料の重要性がさらに高まると、化学科の姉妹学科として設置が要望されていた燃料化学科が増設された(1943年度、40人合格)。しかし学科などの増設とは裏腹に、1941年度から修業期間が短縮された(1941年度卒業生は1941年12月、1942年度卒業生から6カ月繰り上げ)。

1943年には悪化する戦局のなか、1月の新専門学校令で教育体制が「皇国体制」へと大きく傾斜した。1944年3月文部省令28号によって高等工業学校が工業専門学校へ再編され、浜松高等工業学校も4月1日に校名を浜松工業専門学校と改称し、本科第一部・第二部の制度に改編した。第一部は、機械科(第一)・機械科(第二)・航空機科・電気科・電気通信科・化学工業科・燃料科で構成、従来の「学科」から「科」に改められた。第二部には機械科・電気通信科、さらに臨時別科として工業技術員養成科(電気通信科)が置かれた。第二部の設置は夜間課程(修業年限4年間)を置くことにより、さらに多くの工業技術者を養成するためである。

1945年になっても組織拡大は続き、科学研究補助技術員養成所(修業年限6カ月。化学分析科・電気計測科・数値計算科)、航空機科(第二部、入学者58人)を設置した。3月18日に政府は本土戦場化に対応すべき決戦施策の一環とした決戦教育措置要綱を公布し、4月より1年間、国民学校高等科より大学までの操業停止を断行することとした。5月19日と6月18日に浜松市街地は連合国軍の激しい空襲を受け、この2回の空襲で校舎は壊滅的な被害を受け、8月15日の終戦を迎えた。



木村正 第6代校長(1941-1946)
1944浜高工アル(航空)



初夏の航空一号館 1944浜高工アル(航空)



軍事教練

1938浜高工アル(電気)



学生たち

1944浜高工アル(航空)

▶ 財団法人浜松高等工業学校電子工学奨励会 ◀

高柳教授のテレビジョン開発のめざましい成果を受けて、浜松高等工業学校が日本放送協会へ行った協力(高柳教授の嘱託勤務、研究員21人を委譲、技術指導、特許使用権の譲渡など)に対して協会から得た報奨金を元に10万円の基金で、校内に財団法人浜松高等工業学校電子工学奨励会が1937(昭和12)年10月に設立

された。奨励会は浜松高等工業学校における電子工学の実験実習の発展を目的とし、資金の交付、電子工学技術員養成などへの援助事業を行った。この会により浜松高等工業学校での先進的な研究や学生教育で大きな成果を上げた。なお奨励会は現在まで引き続き支援を続け、1985(昭和60)年度に「高柳賞」(「記念賞」「研究奨励賞」)を創設し、2021(令和3)年度までに186人が受賞している。



食堂

1938浜高工アル(電気)



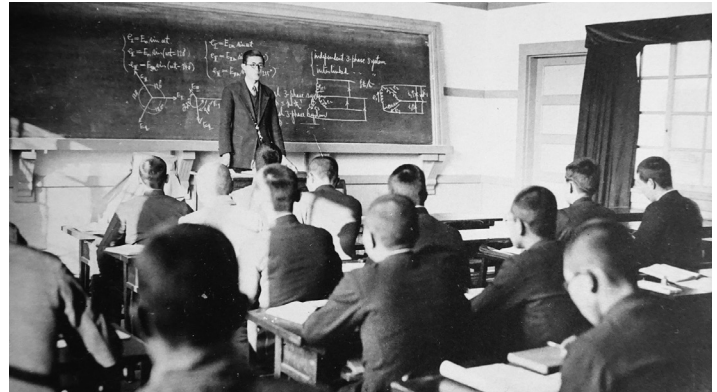
製図

1938浜高工アル(電気)



会計課

1938浜高工アル(電気)



交流理論

1938浜高工アル(電気)

2 | 第二次世界大戦下の浜松工業専門学校

自由啓発の揺らぎ

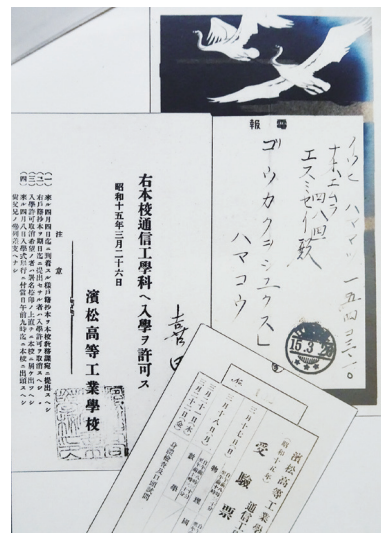


駅伝競走 1943.4.30 田中保(45K)提供

日中戦争勃発(1937年)を契機に、「国民精神総動員運動」が全国的に遂行され、浜松高等工業学校においても元外務大臣による「国民の教養」と題する特別講義が行われた。1938(昭和13)年、「国家総動員法」が成立し、学生生徒の勤労作業を促す文部省の指示の下、浜松高等工業学校では市営運動場や本校第三運動場の地均し作業などが行われた。この時世のなか、1939年着任の長岡寛統第5代校長は、国民精神・国体観念への理解を求め、個人主義・自由主義・唯物主義などの排斥を訓示した。長期化する戦争に向けての対応は浜松高等工業学校でもさらに進み、防空訓練のための「警防団」の組織(1939年)、時局に対応する人物基準確立のための「浜松高等工業学校綱領」の制定(1940年)がなされ、「皇国の使命」の自覚、「奉公の誠」、工業報国が謳われ、自由啓発の校是は大きく転換した。これに基づき、「浜松高等工業学校報国隊」が結成され、軍事教練・防空演習・灯火管制演習などが一層盛んに行われるに至った。

▶ 太平洋戦争下の学校生活・勤労働員 ◀

1941(昭和16)年12月8日、日本は米英に宣戦布告し、太平洋戦争が始まった。校内では、1942年1月の文部省からの「戦時学徒自戒五条」通牒を受けて軍隊並みの週番制度が実施されている。手狭となった運動場の新設は、生徒の勤労奉仕の成果として1942年2月に竣工した。富塚村・広沢村・入野村にまたがる8000坪の運動場は、佐鳴運動場と命名された。5月には、「大東亜建設に対する文教政策」が出され、「大東亜における指導国民たるの資質の錬成」が教育の目的として具体化された。専門学校に対しても「皇道の道」に則った国家有用の人物の錬成が目的とされ、産業報国・職域奉公の修練を中心とし、全寮制による24時間錬成の「学園即兵営」の場となることが目指された。文部省により、「昭和18年度学徒野外連合演習」が仙台宮城野原と愛知県下の二か所で挙行され、中部では6県下77校12000余人が参加した。戦局悪化の中、文科系の学徒出陣も開始される一方、理工系は「皇国学徒」としての使命が強調され、国のための工業の高等教育という主旨から、前述のように浜松工業専門学校と改称された。1944年1月には、緊急学徒勤労働員方策要綱が決定され、生徒達も、豊川や沼津などの海軍工廠などへの学徒動員となった。前述のように、1945年4月からの授業は原則停止となり、1945年度入学者は、入学式もなく勤労働員工場へ配属され、入学式が行われたのは、敗戦後の9月15日であった。この間、6月18日の浜松空襲で校舎がほぼ全焼したため、学校本部は富塚町の西寮に移転して、学校事務が継続された。



受験票と合格通知 1942浜高工アル(通信工)



記念祭 1942浜高工アル(通信工)



駅伝競走

1942浜高工アル(通信工)



入学試験

1942浜高工アル(通信工)



廠営

1942浜高工アル(通信工)

3 | 戦後復興

学校の復興とキャンパス移転

Column

1945年6月から富塚町の西寮で臨時の学校運営を行っていた浜松工業専門学校は、9月、元千葉防空学校浜松分教場(元の高射砲第一連隊兵営)の無償使用を認可され、移転した。現浜松キャンパスでの教育は、こうして応急措置として始まった。授業は、9月17日から再開したが、この施設では教室が不足し、当初は、興誠中学校(後の浜松学院高等学校)および追分国民学校(現・追分小学校)でも行われた。戦後最初の卒業式は、敗戦後の9月29日である。第21回目の卒業生であった。なお、自治会が結成されたのも、興誠中学校の教場である。

Column

占領政策の最初の影響は、1945年12月の航空機科廃止として現れた。同科の在校生は、機械科(第一)に編入された。第一、第二に分かれていた機械科も統合されたので、戦時中の7学科は一旦5学科に統合されたが、1946年5月、機械科が機械科と精密機械科に分離し、6学科となった。

終戦後の9月、文部省は、軍国主義的思想と施策の払拭と平和国家の建設を示唆し、10月22日、占領軍の「日本教育制度に対する管理政策」は、軍国主義イデオロギーの払拭と自由主義、民主主義の推進の方向を示した。さらに1946(昭和21)年3月の米国教育使節団の報告書に基づき、自由主義教育の推進と、そのための大学の増設などが示唆された。全国の学校では「自主確立」の動きや学園民主化の運動も活発になり、浜松工業専門学校でも4月には学校自治会が結成された。戦時中に拡大された医科工科の各専門学校は全国的に大幅に縮小され、浜松工業専門学校でも入学定員の減少、第二部の募集が中止された。

1946年5月着任の第七代江見節男校長(～1951年3月まで。1949年5月より初代工学部長兼務)の下、戦後の教育体制が再建されることになる。修業年限は、2月の法令により、3年制に復していた。この頃からの授業は、前年から仮校舎として使用していた元千葉防空学校浜松分教場の継続使用が実現して、6万4713坪の利用(建坪3752坪)がかなうとともに、この分教場には工作部があり、工場実習の条件も付随していた。同じ頃、教職員生徒の協力で、浜松工業専門学校校舎の一部の整備が行われ、旧校舎と仮校舎(分教場＝兵舎)で授業を実施する体制が一応整った。また、当年度より従来の3学期制から前期・後期の2期制への変更がなされ、翌1947年2月、浜松工業専門学校用地に電視研究施設を中心とする「理工学研究所」が設置された。これにより、分教場の軍用地(6万余坪)が本校敷地となり、広沢の旧校舎用地(約1万8000坪)は、理工学研究所用地となる。佐鳴運動場(約1万5000坪)などを合わせ学校管理の総坪数は9万9594坪であった。

この年3月には529人への卒業証書の授与、4月には189人の入学が許可された。定員の差が、戦時中の増員ぶりと戦後の教育の正常化の落差の大きさを物語っている。

Column

校長時代の思い出

初代工学部長 江見節男

昭和21年5月9日、私は浜松駅に下車した。この日は私が浜松工専に赴任した最初の日であった。駅頭には多数の学生がトラックに乗って私を迎えてくれた。焼け残った古い自動車で、私は学校へ送ってもらった。この古い自動車が10年間私と一緒にあって、戦災学園の復興と新制大学への転換並びに工業短期大学の創設に役立ったものである。20才の頃、東京大学在学中夏休みに帰郷の途、浜松駅に下車して和田村の金原明善翁(その当時翁は72才だったと思う)を訪問したことがあるが、以来

30有余年浜松下車は2回目で、戦災の激しかった浜松市街のこととて、広沢町の校舎もわずかに1棟をのこしたままで、追分町の新敷地(元高射砲学校跡)にある兵舎での授業が、ほそぼそと行われているに過ぎなかった。広沢町に残ったこの1棟が、今もテレビジョンの研究に利用されている電子工学研究施設の建物である。

新敷地は広くとも、学ぶにたる校舎は兵舎の改造にすぎないもので、赴任して最初の仕事は学園の復興と申すべきことであった。教職員の多くも戦災にあい、一家のことを考えつつ教授と研究と忙わしい日々を送っておられた。

学生のために自啓寮という小さいものが一つあったが、他は兵舎を当てているわけであり、校内にある食堂では約500名のものが、朝はうどん、昼はサツマ芋などで若さを養っていた。1週間にわずか1度の寮の風呂もその頃は嬉しいものの一つであった。寮生の昼弁当もサツマ芋が主なもので、それを校庭で食う状況であり、戦後とはいえよい修練でもあった。そんなわけで学生達の気持ちも、将来どうなるであろうか見透しがつかず、“先生はどうして今後教育して行かれますか”という質問を度々受けた。講堂らしくはないが大きな部屋(格納庫)に学生一同を集め、私は勤勉、

親切、清潔というようなことを目標にして、ともに学園の復興に努力してほしいと話した。この三つの目標は実行しにくいものであるが、戦後最も大切なものと信じたためである。その当時は戦争中の反動のためか、出席をとるというようなことに学生達の反対する気風が強かったので、負けた国の国民としてわれわれはよく働かねばならぬ。そして学生は学生として学問に精進したい。そう考えると出席をとるか、とらぬかということは問題にならないことだということを説いて了解させることができたと思う。またその頃授業料値上げの問題もあって、全国的に学校ストの気分が盛り上がり、ある日20有余名の学生は2名の教官に伴われて私を訪ね、明日学校ストを行うかも知れないからとの報告があったので、勤勉をモットウとする学生が学問を放棄するというような考えには賛同し得ないと申し伝えたところ、よく私の心持を理解してくれたものか、学校ストは行われなかった。このことを思い出すと、今日でも喜びを感じざるを得ない。

また、その頃は食糧のことで、寄宿舎の炊事委員の苦労は並大抵のことではなかった。夏休みの終る頃、炊事委員より1週間休みをのばして欲しいとの申し出があった。その時私は、全国的に夏休みをのばすことが行われているようだが、一つの学校だけでも規定通り授業を行いたいものだとしした。委員達はこれをよく了解してくれたのであろう、直ちにトラックに乗ってサツマ芋の買出しを始めた。その頃、汽車に乗るにも窓から入ったり出たりする風があり、汽車中で昼飯代りに焼いたトウモロコシやふかした芋を口にしているというわけで、住はもちろん衣にも食にも心を悩ますことのみ多く、親切ということ、清潔(純潔)ということにお互いが気をつけ励ましあい、助けあって行きたいものだとして学生達に話したわけである。

他面、精神的にゆとりを持ちたいとか、教養というようなことを考え

て、学生達に長谷川如是閑、安倍能成、天野貞祐、森戸辰男、亀山直人、勝沼精蔵、湯川秀樹、笠信太郎、日高第四郎、前田多門、谷川徹三、金森徳次郎の諸氏を招き講演をきかせることができた。天野先生の“学而思思而学”の額は工学部の学生会館に掲げてあるが、これ等の先生の話は大変感銘ふかいものであったと思っている。学生達の希望もあり、天野貞祐氏はその後も来講され、学生達と食堂で食事をされる等親しく懇談の機会を与えられた。これらの講演会はひとり学生のみならず、浜松市の人達にとっても意味があったように思われる。

浜松には楽器に関係ある会社があることを思っ、度々東京より音楽家を招き演奏会を行うほか、学生達自身で学生演劇を試みるということが行われ、これらの催しは戦後の何ともいい得ない不安な気分を、幾分でも払いのけるのに役立ったと信じている。

江見節男「顧みて工学部を思う」
『静岡大学10年史』より

浜松高工の思い出

櫻場周吉

(私が)工学部の前身であった浜松高工に赴任したのが、1939(昭和14)年4月である。(中略)

1941(昭和16)年の晩秋のある日突然発病、太平洋戦争の直前入院、1年半程の療養生活後辛うじて復職した。戦争中の混乱した学園生活、勤労働員されて各地の工場に分散された学生と起居を共にし、細々と講義をした思い出(後日ある卒業生から、先生の工場で行われた金相学(金属組織学)の講義が、自分の進路に大いに役立ったと語られた)、敗戦後の食糧欠乏と過労のため病気が再発し、ある宅の倉庫の一隅に病床で動けぬ私をリヤカーにのせて入院させてくれた卒業生のこと、大手術した私に輸血してくれたいま一人の卒業生が、一年後に難病で死去したことなど記憶に鮮明である。給料がソフト帽

子一個の値段位のインフレのはげしい時である。戦災で一切の書籍を失った私に、古い専門書を送ってくれた卒業生もあったが。すべて、かつての教えた人々の思い出にかかわることが多い。休職を免れるためわずか6カ月の入院で退院。4キロ近い路のりをあえぎながら通勤した苦しい日々だった。

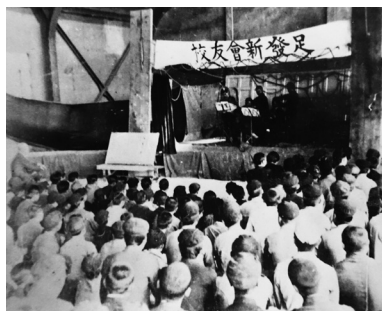
戦争の数年間は現在の工学部キャンパスの所にあった焼け残りの兵舎や高校の校舎を間借りしての授業で、何もかも不如意の年月であった。そして1949(昭和24)年6月、静岡大学が設置されたのである。開学したとはいえ、工学部は兵舎をわずかに改装した程度の校舎で、夏は暑苦しく、冬は炭火でやっと暖をとったもので、教室内は寒さこの上ないものであった。

キャンパス内に僅か1400平方メートル足らずの最初の鉄筋の研究・実験棟が建てられたのは十年後である。100万円もしないスペクトルフォトメーターが高価設備として最初に学部で購入されたのが5年後であった。部品を幾度も取り換えた程、昼夜の別なく使いまくったものである。現在の大谷キャンパスや工学部の建物設備を見る人々は想像も出来ぬことであろう。

学生の多くは草履や下駄ばきで、靴をはいて登校するものはまれだった。みんなが空腹にあえいでいた。学生の中には戦争から解放されて帰ってきた者もいた。誰もが悩みと苦痛をしのばせていたのであろう。しかし私の記憶に残るものは彼等の明るく生々とした充実感のまなざしである。実験室でもわれわれのぼろぼろの住家でも彼等との談話が絶え間なかった。国の歴史のこと、政治や社会のこと、ゆっくり考えてみる余裕などなかったに違いない。ひたむきに将来に何かを求めて止まぬ時代であり、教官も職員も学校の再建と立派な大学を作ろうと必死だったのである。

(櫻場周吉『枯涸の記』1982年所収
初出：『静大だより』第48号「退任に際して」1977年4月)

▶ 浜松工業大学と静岡大学工学部の間で



校友会新発足 1946年

本田アル



兵舎と正門 終戦直後の和地山移転の頃
本田アル

1946(昭和21)年11月3日、日本国憲法が公布され、翌1947年3月に教育基本法、学校教育法が公布された。修業年限4年を原則とする新制大学が設置されることとなり、大学による自主的な基準設定が行われることになった。5月には、全国46大学の代表による「大学設立基準設定連合協議会」が開催され、地方の各大学高専校の意見を求めるべく、中部ブロックでは6月に官立高等専門学校長の会議が開かれた。

浜松工業専門学校では、1947年6月、自治会主導のもと、同窓会と協力して「浜松高工会」が結成され、大学への昇格運動を推進することとなった。8月には、静岡県知事を会長とする「浜松工業大学期成同盟会」が結成され、寄付金の募集や啓蒙活動などを行った。他方、10月には校舎の第一期補修工事が完成、教室や実験室、図書閲覧室などの新営事業も進められ、1948年1月には同窓会である浜松工業会の現役学生厚生事業として生産工場も開設された。

しかし、浜松工業専門学校を個別に大学として設置する認可申請は通らなかった。連合国軍総司令部の指導を受け文部省は国立大学を一県一大学とし、5月、浜松工専・静岡高校・師範学校の代表者が、新制静岡大学の組織案について協議し、法文学部と学芸学部を静岡市に、浜松工専をベースとする工学部を浜松市に設置する三学部複合大学にすることに合意した。この協議会において、浜松の学部と静岡の学部の橋渡しの意味をもって、工学部のジュニア学生の教育の一部(約3分の1)を静岡で引き受けることが承認された。

1949(昭和24)年4月閣議決定された「国立大学設置法」に基づき、静岡大学は第二期校とし、本部－静岡市、工学部－浜松市、文理学部－静岡市、教育学部－静岡市・浜松分校・島田分校、として認可された。こうして浜松工業専門学校は、一般教養の自然科学関係の一部を担当するとともに、機械工学・電気工学・工業化学の三科を置く静岡大学工学部(定員560人)として新たな歩み始めることとなった。



図書館 1948年頃



三輪アル 工場 1948年頃

三輪アル

昭和二十二年十月

創立二十五周年記念祭プログラム

濱松工業専門学校

21	20	19	18	17	16	13	11	8	日
火	月	日	土	金	木	月	土	水	曜
テレビジョン映寫實驗	各科展覽會 近縣特產品振興展示會	自 午後一時 東京フィルハーモニーオーケス トラ音樂會第二回演奏 各科展覽會 近縣特產品振興展示會 テレビジョン映寫實驗	后午	午前		自 午前十時 本校講堂 文化講演 武者小路實篤	自	自	自
			自 五時 於本校講堂 東京フィルハーモニーオーケストラ 音樂會第一回演奏	自 十二時半 各科展覽會參觀開始 記念祭式典 來賓參列 テレビジョン映寫實驗 近縣特產品振興展示會			自 九時 於 本校講堂 記念祭式典 來賓參列	「文化と教養」 天野貞祐 午後二時 一高校長	
バーバラ・スタンウィック	コロンビヤ映画 「新妻は御醫者様」	映画會 於 濱松劇場	學生演劇 「アルト・ハイデルヴエルグ」 「檢察官」 其ノ他 「リヤ王」	晝夜於東洋劇場	隊 街頭宣傳 街頭ストーム 街頭演說 音樂 假裝行列 花自動車	自 午後二時 於 市會議事堂 學術講演			校外行事



浜松工專創立25周年記念祭プログラム (浜松工業会蔵)

1947年



浜松工專創立25周年記念祭ポスター (浜松工業会蔵) 1947年

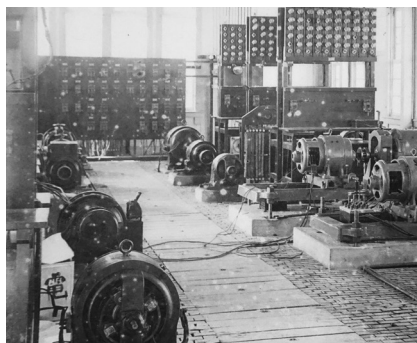


記念祭

本田アル



記念祭チラシ 1931浜高工アル



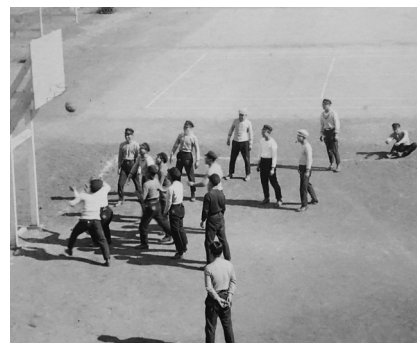
電気学科室

1926浜高工アル



数学科室

1926浜高工アル



バスケットボール

1926浜高工アル



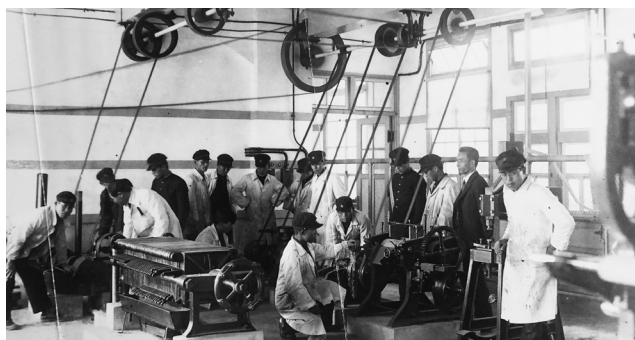
野外教練

1926浜高工アル



製図室

1926浜高工アル



実験

1931浜高工アル



実験

1931浜高工アル



日本楽器株式会社(工場見学)

1931浜高工アル



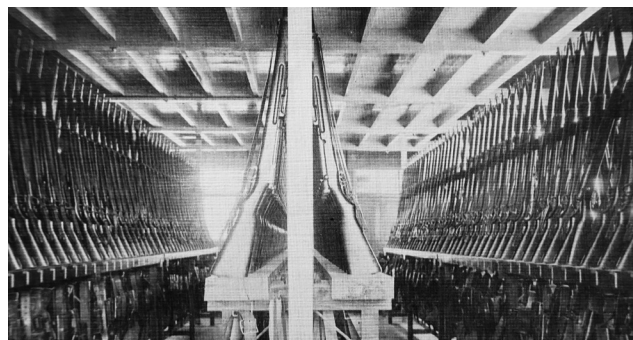
造幣局(工場見学)

1931浜高工アル



三菱造船所(長崎)(工場見学)

1931浜高工アル



銃器室

1931浜高工アル

■校内■



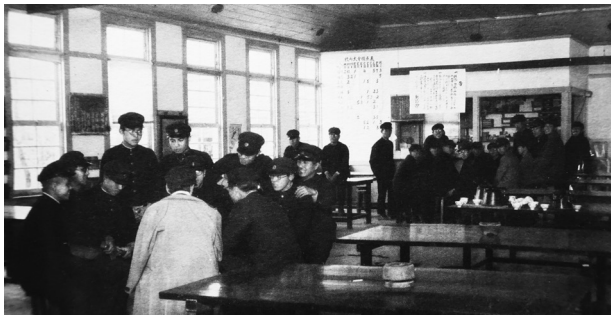
教務課

1931浜高工アル(電気)



図書室

1931浜高工アル(電気)



生徒控室

1931浜高工アル(電気)



売店

1931浜高工アル(電気)

■行事■



記念祭

1931浜高工アル(電気)



駅伝

1931浜高工アル



駅伝余興

1931浜高工アル



新入生歓迎会

1931浜高工アル



駅伝

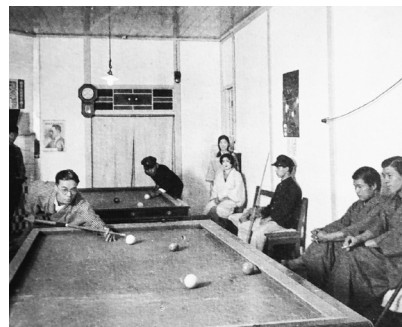
1931浜高工アル

■遊ぶ■



佐鳴湖

1931浜高工アル(電気)



ビリヤード

1931浜高工アル(電気)



麻雀

1931浜高工アル(電気)

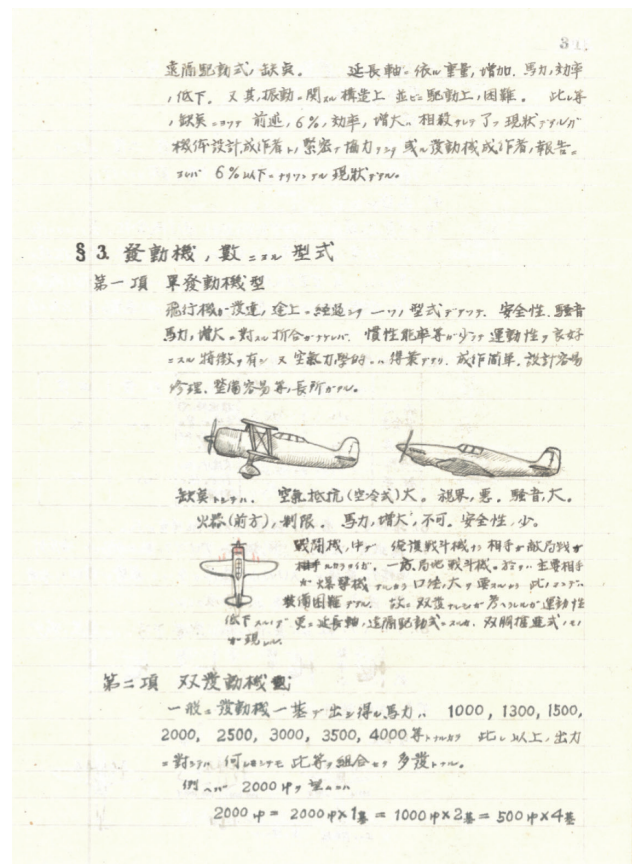
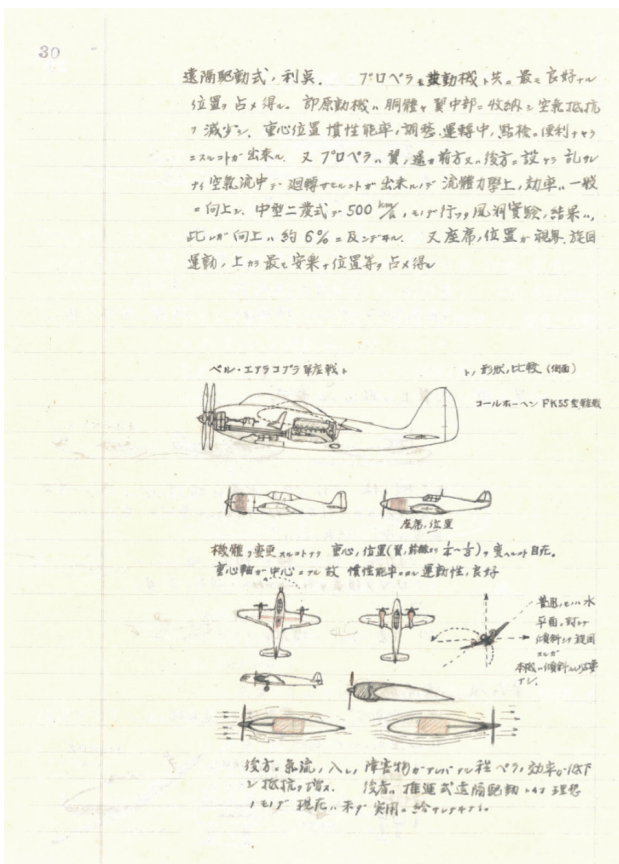
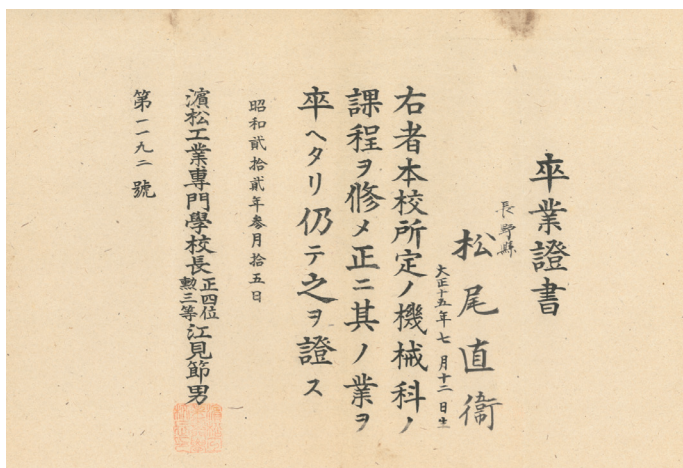
戦時下の学び — 浜松工業専門学校航空機科学生の手記から —

ここに掲載するのは、戦時から戦後の混乱期に浜松キャンパスで航空工学を学んだ学生の手記である。ノートは、主として1944(昭和19)年度中の講義の内容を記載していると思われるので、浜松高等工業学校が浜松工業専門学校と改称された最初の入学者ということになる。

戦時最末期の学びに関する貴重な講義

録を残されたのは、長野県出身の松尾直衛氏で、ご家族から資料(卒業証書と3冊の講義録)を託された。松尾氏は、1926(大正15)年7月生まれ、1944年度の浜松工業専門学校入学者となり、1947(昭和22)年3月に卒業された。航空工学の内容は、戦時を反映して実戦想定の新機学であり、専門学校の専任講師の講義内

容のほか、卒業生を中心に航空機関連産業に携わってきた方々を特別講師として招聘し、戦闘機生産を多角的な側面から学んでいた姿が読み取れ、日本の科学政策を批判している講師もいたことがわかる。ここでは講義録の一端を紹介する。



- 7). 必要, 大 $\rightarrow$, 材料 $\rightarrow$ 得難 $\rightarrow$.
件、長 $\rightarrow$ 材料 $\rightarrow$ 得難 $\rightarrow$ 。此缺點。
近時像ゴム膠着劑、接着補 $\rightarrow$
板の $\rightarrow$ 問題 $\rightarrow$ が一部分。
- 8). 主翼、胴體等、接合部分、於 $\rightarrow$ に強 $\rightarrow$ く。
飛行機、分割 $\rightarrow$ を、必要 $\rightarrow$ 。多量生産
並行、容易。
- 9). 乾濕 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 可法 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 能 $\rightarrow$ す。此 $\rightarrow$ 根本的缺陷 $\rightarrow$ 。塗料 $\rightarrow$ 防 $\rightarrow$ 腐 $\rightarrow$ 策 $\rightarrow$ は
 $\rightarrow$ 絶對的 $\rightarrow$ の $\rightarrow$ 要 $\rightarrow$ 。


- 10). 多量生産。預貯 $\rightarrow$ の問題。金属材料 $\rightarrow$
主としてプレス作業、僅少工程 $\rightarrow$ を得 $\rightarrow$ る。不 $\rightarrow$ 規則
形 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 板 $\rightarrow$ 材 $\rightarrow$ より $\rightarrow$ 滿意 $\rightarrow$ に $\rightarrow$ 造 $\rightarrow$ る $\rightarrow$ 程度 $\rightarrow$ は $\rightarrow$ 限 $\rightarrow$ り $\rightarrow$ ある。
- 11). 燃焼 $\rightarrow$ 易 $\rightarrow$ い。此 $\rightarrow$ 根本的 $\rightarrow$ の本質的缺陷 $\rightarrow$ 。
不 $\rightarrow$ 明 $\rightarrow$ 確 $\rightarrow$ 等、場合。破壊 $\rightarrow$ 易 $\rightarrow$ い。操業上注意時、滑定點、不斷着火、
開始 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 主翼 $\rightarrow$ 陸 $\rightarrow$ 上、事故 $\rightarrow$ 層 $\rightarrow$ 起 $\rightarrow$ る。
- 12). 日光、影響、受 $\rightarrow$ 易 $\rightarrow$ い。將 $\rightarrow$ 日光中、紫外線 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 變形 $\rightarrow$ 變質 $\rightarrow$ 破壞 $\rightarrow$ する。
- 13). 電氣容量 $\rightarrow$ 不足 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 。
金屬機、全坏 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 導 $\rightarrow$ 体 $\rightarrow$ として $\rightarrow$ 設 $\rightarrow$ 。
電氣容量 $\rightarrow$ は大 $\rightarrow$ なり。然 $\rightarrow$ も、木製機 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 用 $\rightarrow$ ふ。
個々、金屬製品 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 用 $\rightarrow$ ふ、用 $\rightarrow$ ふ。然 $\rightarrow$ も、
此等、固 $\rightarrow$ く、金属結合 $\rightarrow$ 化 $\rightarrow$ 火気放電 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 生 $\rightarrow$ ず $\rightarrow$ 。
發火 $\rightarrow$ 器 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 設 $\rightarrow$ け、bound $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 液 $\rightarrow$ で $\rightarrow$ 連絡 $\rightarrow$ 結合 $\rightarrow$
して、大 $\rightarrow$ な $\rightarrow$ 電氣容量 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 必要 $\rightarrow$ とする。
- 14). 重量、増加。
輕便機 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 利用 $\rightarrow$ し、機械
力 $\rightarrow$ 相當、強化 $\rightarrow$ 不使用 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 又主要部分、評價 $\rightarrow$
に $\rightarrow$ 相対大 $\rightarrow$ の $\rightarrow$ 相當安全側 $\rightarrow$ を見 $\rightarrow$ 、必要 $\rightarrow$ に $\rightarrow$ 増 $\rightarrow$ 加 $\rightarrow$ す。此 $\rightarrow$ 三 $\rightarrow$ つの $\rightarrow$ 組合 $\rightarrow$ 。
比 $\rightarrow$ 較 $\rightarrow$ 著明 $\rightarrow$ 能力 $\rightarrow$ 不足 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 補 $\rightarrow$ う。合成 $\rightarrow$ 皮 $\rightarrow$ を $\rightarrow$ 剥 $\rightarrow$ ぐ。自然的 $\rightarrow$ 重量增加 $\rightarrow$ 。




- 又主翼外板 R/F/P 5~8 mm 程度、必要の場合 7mm。金屬機、完全同一の不裂製作は、假定しない。金屬機、構造重量、約 30% 不裂が出来、場合々尚、上へ 30% 程度、追加が必要なり。結局、於て、構造材料、約 10%、重要増加ナラス。金屬機、比較の上昇率等、於て性能低下、未ダ不明ナル。
- 16). 強化木 = 弹性係数：比重の小さい。従つて曲げ剛性も、振動剛性も、強化木に相當寸法、制端する、必要あり。所、形狀寸法、重量等、制限重量、增加し満足する、出来ず、充分な曲率剛性、振動剛性と異なり、出来ず。従つて機体振動、限界速度の小さい。即ち、急降下制限速度の小さいナル。
- 高高度、又は、特、急降下爆撃、たゞ剛性の小さい、上、固脚、悪影響大ナル。故、急降下、際、爆彈初速を高く知果大ニ不可。又従つて戰鬥機、運動、高々性能低下ナリ。
- 17). 一般、利用内部容積の小さいナル。
- 今ボーガー・ハルケン、構造、異國より比較で見ると。
- 翼
- 普通木材
燃料タンク
強化木材
- 此、莫、相違大ナルヲ見。翼、於て差著ナリ。
- ジュラルミン材
鋼材
- 胴體
- （以下は図解）
- 18). 脚、取付、主要、裝備者困難ナルナル。

[撲接, 概要] 19.9. 午後6時開演。12.
海軍航空隊創立後2年, 今日, 海軍不裁制部分品
製作。『敵を知り己を知り百戦百勝』。敵
言如斯。然敵知ル一部。今日, 日本、
結構。今日工場要負, 『敵を知り己を知り』, 基之
シテ17遺城。或工場, 『突撃時間』。死死隊。日
際張。九州隊。北九州工場, 原張。北九州
本州工場, 自己主義。航空決戦。明日。突。
然。然。最後, 勝利即。ワシントン城下, 盟
。今日, 科学兵。能。明日, 科学。コ
新兵器。勝利定。今日, 決戦。明日,
科学。賞。

飛行機，安定，操縦性及ヒ操縦

飛行機、安定性、飛行中或の何の原因、何の
突風、操縦、依、操縦、何の軸、何の傾、何の、何の、
不安定姿勢、何の、何の、何の、何の、何の、何の、
操縦、安定性、何の、何の、何の、何の、何の、何の、
靜的、安定、動的安定、何の安定、何の安定、何の安定、
何の安定、何の安定、何の安定、何の安定、何の安定、何の安定、

安室... 縦揺(ヒナグ) = 機頭上下、対シカ... 縦揺安定
横揺() = 機序廻リ、揺レ... 横揺安定
揺揺... 揺揺安定

縱安定 航空力学-初, 普通, 漢, 1977, 縱安定-表
1977年. 1977年, 安定, 航空力学-初, 漢, 1977

安定性，良悪へ，基準。
主翼面積。対し尾翼，面積，大い様形。
尾翼面積。
主翼面積
又尾翼容積了 () 大い様形。
重心，位置，主翼へ，関係。
縦安定， g かつ 前。出へし。s。

 d ，右舷より， g - 尾翼，創作。対し，即構造上，問題。
重心，位置，問題ナル。

α, 右左スルモノ、カ、尾翼, 倒体=対スル, 即構造上, 問題ヲス、
重心, 位置, 問題ヲスル。

結局 縦向き主翼、対心重心、位置一番モノは
71% 重心、上下位置、ソレ程差便、下へ下へ、ソレ
程少シ安定する


 兩者間... 重心 = 安定差
 可考慮此必要時。

主翼ハソレ自身ハ揚力ヲ生スルモテ不安定ニ此レハ尾翼ヲ補フ
 翅高カ大テラハ 風圧カ大ナル。

翼断面, 役割.
計計前, 此, 風洞試驗, 行,
安定性, 羽, 氣流, 方向, 機械, 方向, 方向.

縱操從



ガスバー 昇降舵 } 不能ハス。

機首, 上下振ル 昇降舵ヲ補フ。

フ^ロペ^ラに就いて.

抵抗力、發動機、重力、揚力、スル。

此、時、揚力が最も大で、
抵抗力が最も小さい断面をスト
カへ必要である。

要办PIL。↑



合送・商店・用紙・PP4 ピックアップ

銃打作業 内田利一郎、講 (19.)

飛行機、全作業時間の半分見れ、各会社で自分の
リベットの、作業時間大約 23% である。此の機械の
手は臭い、非常、重要、である。此の、学生は、女子自身の手
を打つのである。此の勝つ、今日から本上練習、不
足 29% の学生、結果、10% 以上である。此、本、打つ
は、学生、学生、非常、学生

非常：数の言ハ種々多種多様。此の技術ヲ決定シ
ルノ内ニ三菱、海軍陸軍、コレバツト、多少ハ異ナリテモ
尙社、種類上最近デモ三十種類有ラン。

鏢



此血條，date 採刀 註せし。 $\theta = 47^\circ 25' 76''$.
ハ次系等，消し行。 90° 。又 $147^\circ 120''$ ，此系用也。
187

411 挂值人カ下4元

第2章

静岡大学浜松キャンパスの成立

1965年頃全景

1966化学工卒アル



第 1 節 学部・研究所の整備

1 | 工学部の発足

► 大学昇格



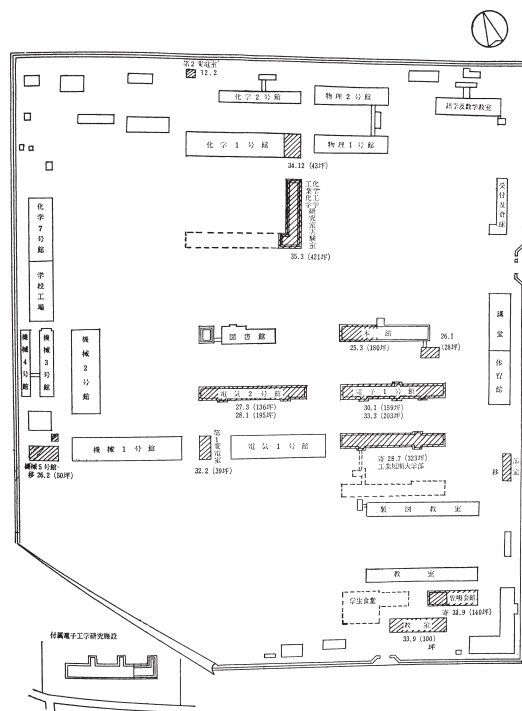
本田アル

第一次「静岡大学設置申請書」は、1948(昭和23)年6月に提出したが、計画の一部に不備があるとされ、不受理となった。この時は静岡大学を工学部と学芸学部の2学部で構成する案であり、工学部は機械、電気、工業化学、応用理学の4系統で構成する計画であった。文部省の計画指導に基づき、第一次案を変更し、教育学部を独立させ、工学部から応用理学を削って、同年10月、第二次「静岡大学設置申請書」が提出された。工学部には、機械工学、電気工学、工業化学の3系統を置く案であった。1949年3月、大学設置委員会によってこの案にしたがって、静岡大学工学部の設置が決定された。第一回入学式は1949年7月に東部地区は文理学部で、西部地区は工学部で挙行された。全学部入学者は731人であり、そのうち、工学部は93人であった。

9月から古い兵舎を補修した建物を校舎として授業が行われた。そして11月には浜松市公会堂で浜松工業専門学校と静岡第二師範学校の大学昇格を祝う祝賀会が開かれた。「浜松工業大学」の実現を目指し、単独の大学が無理な場合は大学本部の誘致も目指していたが、一学部とは言え、国立大学の設置は浜松市に



静岡大学10年史



静岡大学10年史

とって慶賀すべき出来事であった。大学昇格祝賀会は1週間に渡って開催され、諸行事が行われた。29年の歴史の中で、多くの人材を送り出した浜松工業専門学校は、工学部の設置に伴い、1951年、第26回の卒業式を挙げて廃止された。同時期に「浜松工専同窓会」総会が開かれ、浜松高等工業学校、浜松工業専門学校に新制静岡大学工学部卒業生も会員に加えて「浜松工業会」と改称された。

▶ 初代学部長・講座編成 ◀

工学部初代学部長には浜松工業専門学校校長の江見^{えみみさお}節男が就任した。江見は1890(明治23)年岡山県生まれであり、東京帝国大学理科大学純正化学科(現在の東京大学理学部化学科)卒業で、浦和高等学校(現在の埼玉大学)、第八高等学校(現在の名古屋大学)教授等を経て、1946(昭和21)年、工学部初代学部長に就任した。江見には『高等有機化学』(裳華房、1933年)などのほか、『高等化学計算法解義』(裳華房、初版1932年)の著書がある。本書は版を重ね、静岡大学附属図書館浜松分館に所蔵するものには「修正8版(1943年)」がある。本書が江湖に評価され版を重ねたこと、また、江見が研究熱心で改訂を怠らなかったことが知られる。

工学部発足時、数学2講座(教授1、助教授4)、物理3講座(教授2、助教授1、講師1)、機械工学5講座(教授2、助教授4、講師2)、電気工学5講座(教授3、助教授3、講師2)、工業化学5講座(教授4、助教授4、講師3)、繊維工学1講座があった。ほかに、体育・社会・人文・外国語は併せて教授1、助教授5、講師1が認められている。全体では教授12、助教授21、講師9の42人の教員計画が認められた。

学生の募集は、工学部80人に加えて、文理学部乙類40人が2年修了後に工学部に進学することになっており、合わせて120人の定員であった。



江見節男 初代工学部長(1949-1956)
1955アル

Column

浜松工業大学構想から 静岡大学工学部設置へ

初代工学部長 江見節男

戦災をうけた学園も、一応復興の域に近づいてきたとき、新制大学の問題が起ってきた。静岡県は案外細長い地域を占め、当時浜松市には浜松工業専門学校、静岡第二師範学校、島田市には静岡青年師範学校、静岡市には静岡高等学校、静岡第一師範学校、三島には静岡第一師範学校女子部があって、それらの学校はそれぞれ地元とよく結びついて、伝統も学風も自然に異なるものを持っていた。

工専としてはそのまま浜松工業大学をと念願し、卒業生はもちろん、地元の人達もこれに賛成されたのである。これと同じように各学校それぞれ単独昇格を希望されたことであって、自然に種々の案が工夫された。しかし、中央の設立の方針は一県一大学ということに決まり、上に述べた各学校は一緒になって一つの大学

学を形成せねばならぬことに決まった。大学の名前を静岡とするか、浜松にするかということも数回県庁に集まって論議されたが、今日の如く静岡大学と呼ばれることにまとまった。そして静岡高校は文理学部、師範学校は合一して教育学部、工専は工学部として発足することになった。

新制大学として各学校における教授、助教授、講師の資格審査のこともあり定員数のこともあり、しかも静岡大学全体の教職員の定員数のこともあり、予算に関することもあり、3学部間においてその打ち合わせに少なからぬ日数を要したことはもちろん、相互が都合よく運ぶようにと努力に努力をかさねたものである。その生みの苦しみ今日の静岡大学の大きさをしていると信じている。

工学部のことを考えると、1947(昭和22)年1月に学園復興に協力するための父兄会が生まれ、今日においても父兄会は

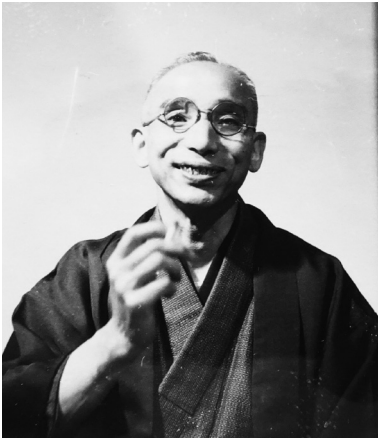
学校当局に大いに協力されている。その年の7月には大学昇格準備の事務局もでき、その8月には浜松工業大学期成同盟会(県知事小林武治氏が会長)もでき、県市のこの方面における協力体制も活発になってきた。

静岡大学の構想に伴って、学長問題についても委員は東京に飛び、京都に走り、それぞれ初代学長のことで忙しい思いをした。昭和24年5月末、年長者の故であろう、一応私が学長事務取扱いに任ぜられ、形式的に静岡大学が生まれた。それで私は毎週2回浜松から静岡にでかけたかと思っている。そしてついに東大を定年退官されていた工学博士井口常雄氏が、昭和24年6月18日初代学長に就任されることに決まって、私は重荷をおろしたわけである。

江見節男「顧みて工学部を思う」
『静岡大学10年史』より

2 | 工学部の発展

▶ 精密工学科・化学工学科の増設と佐鳴会館の竣工 ◀

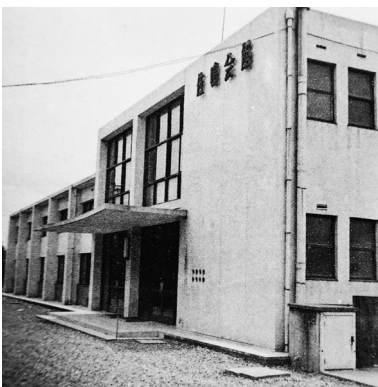


西岡新太郎 第2代工学部長
(1956-1957) 附属図書館蔵

第2代工学部長は西岡新太郎である。東京帝国大学工科大学応用化学科を卒業し、複数の会社勤務を経たのち、名古屋高等工業学校(現在の名古屋工業大学)講師を経て、浜松高等工業学校教授となった。静岡大学発足後、工学部教授となり、1956(昭和31)年、工学部長に着任した。この年、浜松工業会創立30周年記念事業として「佐鳴会館」の建設が決議され、西岡は建設推進の一翼を担った。

西岡以降、それぞれの工学部長のもと、工学部は発展していく。1957年、工学部に精密工学科が設置され、従来の機械工学の分野では扱わなかった応用物理、電子工学、計測制御、機械要素、精密加工などの講義が行われ、産業のオートメーション化に寄与した。

ついで、1958年、化学工学科が新設され、拡散単位操作、機械単位操作、反応工学、化学工場計画等の講座が生まれ、石油化学や食品工業分野に貢献することになった。また、前工学部長時代に企画された「佐鳴会館」が竣工し、1957年、落成式が行われた。



設立当時の佐鳴会館 1963機械工卒アル



佐鳴会館 1975工学部案内

発起人各位殿

昭和三十一年十月

佐鳴会館建設事業会

会長 浜松工業会長 鈴木 俊三
副会長 父兄会長 安田 元三
顧問 工学部長 西岡 新太郎

拝啓 菊花薫る候貴台愈々御清栄の段お喜び申し上げます。
さて静岡大学工学部同窓会浜松工業会の三十周年を記念するため「佐鳴会館」を建設する計画をたて、本事業会の発起人として貴台の御協力をお願いしました処、早速趣旨に御賛同下され、お蔭を以て別刷の通り多数の御快諾を得、誠に「佐鳴会館建設事業会」の発足を見るに至りましたことは、誠に力強い次第感謝にたえないところでございます。
其の後事業計画も順次進展し、資金募集の要項も同封別紙の如く決定いたしましたので、これにしたがって募金を開始することになりました。何卒本事業達成のため絶大なる御高庇御協力を賜わり度く懇願申し上げます。
甚だ略儀ではございますが書中を以て御礼の辞申上げ、併せて御願まで申し上げます。
敬具

佐鳴会館竣工よびかけ文 1956年

精密工学科の学生時代

山内良平(44F)

1965(昭和40)年に静大工学部精密工学科に入学しました。当時の浜松地区は電研と機械系・電気系・化学系の一部の3つの学科、佐鳴会館、高柳記念館等が鉄筋でその他は殆ど木造でした。大学キャンパスの道路は現在と異なり並木道がなく大学という雰囲気は殆ど感じませんでした。

学生時代の1～2年生の教養の物理、数学等は木造の校舎で授業をうけました。当時は現在とは異なり、学生の男女比は9対1位でした。授業内容は若手の

助教授クラスの先生の講義は新鮮味があり感動するものがいくつかありました。自分自身工学部の教科はあまり勉強しませんでした。高校時代から数学が好きでルベグ積分や測度論、位相幾何などを一生懸命勉強していました。さらに高校の同窓生で京都大学に入学した友人にスミルノフの高等数学教程(12冊)、高木貞治の解析概論、ファインマンの物理学を読んでおけと言われ、その本を夢中で読んでいました。感動する項目が多数ありました。

卒論はホログラフィーの理論の理解と実験を研究室でおこないました。ホログ

ラフィーの実験でまずホログラムを作成しそのホログラムにHe-Neにレーザーを照射し360度可視可能な画像が写し込まれました。大変感動した一瞬でした。指導教官は鈴木助教教授でした。下宿生活で記憶に残っているのは、歓迎会の時、初めてビールを飲んだのですが、ビールは大変まずいという印象が残っています。次回のビールの味は180度変わりいわゆる喉越しのうまいビールになりました。もう一つ今思い出される事柄は下宿のご主人に遠州灘に連れて行って頂き、投げ釣りをしたことで、釣果はボーズでした。

▶ 合成化学科設置・高柳記念館建設・工学研究科の発足 ◀

1961(昭和36)年10月、工学部に高柳記念館が建設された。また、1962年、合成化学科が新設され、合成化学工業分野で活躍する技術者を輩出するようになった。合成化学科では、有機化学工業、無機化学工業を問わず、合成化学分野のあらゆる側面にわたった。

1964年、工学部に大学院工学研究科(修士課程)が設置された。このとき、名古屋工業大学、神戸大学、徳島大学、群馬大学、山形大学に大学院が同時に設置された。静岡大学工学研究科は、機械工学、精密工学、電気工学、電子工学、工業化学、化学工学の6専攻課程で発足し、学生定員は合わせて56人であった。

第5代工学部長には、樋口泉が就任した。初の静岡出身者であり、東北帝国大学理学部を卒業後、同理学部化学教室助手などを経て、1963年、静岡大学工学部に赴任し、1965年、工学部長となった。

1965年には、電子工学研究所が設置された。当時、附置研究所は旧制の大学にのみ設置されており、新制大学に設置されたのは最初であった。

1971年、情報工学科が新設され、情報工学分野の人材輩出に貢献していく。1972年、記念図書館(浜松分館)が完成し、7万冊の蔵書を擁し、教育・研究を支える役目を果たした。1972年の入学者は学部生412人、院生105人、工業短期大学部は194人であった。

1974年3月には情報工学科の教育用電子計算室が、1976年3月には廃液処理施設が、1978年には体育館が、1979年2月には工学部会館が、1980年には化学工学科研究棟が建設され、工学部は充実していく。



井形厚臣 第3代工学部長
(1957-1961)

小見山アル



樋口泉 第5代工学部長(1965-1969)
1966機械工卒アル



キャンパス内

1960機械工アル



正門

1960機械工アル



図書館

1964精密工アル



学校工場(外側)

1964精密工アル



学校工場(中)

1966化学工卒アル



正門付近

影山アル



噴水付近

影山アル

1960年代のキャンパス

静岡大学名誉教授 中村 保(43M)

私は終戦の翌年、1946(昭和21)2月21日、浜名郡神久呂村大久保の片田舎に生まれた。地元の小・中学校、高校を卒業したのち、国立大学一期校の受験に失敗して、二期校の静岡大学工学部に1964(昭和39)年に入学した。その当時、城北キャンパスには、戦時中の建物として、現在の正門左横の講堂、電子工学研究所北の共通教育教官室と武道場、運動場横の機械工学科教室と製図室、

機械棟(現・総合研究棟)西の学校工場、体育館南の生協食堂等が、そのまま利用されていた。このような中で、機械棟、化学棟、および電子工学研究所棟、高柳記念館、佐鳴会館等の鉄筋コンクリートの建物が徐々に建てられつつあった。

大学卒業時の1968年には、電気電子棟が建てられている。また、すでに、スズキ(株)からの寄付によるプールも見られた。この頃まで、工学部1年生の教養教育は、浜松では教育学部浜松分校(現在の浜松学院大学短期大学部)

と静岡市の浅間神社近くにあった大岩キャンパスに分かれて実施されていた。学生運動真っ盛りの時代で、教授会と学生の団体交渉や講義のサボタージュが頻繁に行われ、数人だけで講義を聴くこともあった。しかし、1968年、恩師となる河合望教授の指導下、卒業研究で塑性加工のトライボロジー(摩擦・摩耗・表面科学)の研究に取り組むことになった。それから半世紀に亘ってこのトライボロジーの世界に没頭することになるとは当時夢にも思わなかった。

3 | 工業短期大学部

▶ 工業短期大学部の開設と4学科制への発展 ◀

工業短期大学部は、1953(昭和28)年8月1日に静岡大学に設置された。夜間の三年制短期大学で、男女共学であり、前年の1952年10月に文部省(当時)に出された設置申請書には、地元高等学校並びに産業界からの要望が高まったことが開設の理由として挙げられている。

開設当初は機械科(後の機械工学科)、電気科(後の電気工学科)の2学科(学生定員各40人)だったが、1959(昭和34)年には工業化学科(学生定員40人)、1966年には電子工学科(学生定員40人)が増設され、志望者が多かった機械科の定員を80人に増員した。



中村 保 名誉教授

創立当時の思い出

元教官 柳沢 猛

私は、工短の創立1953(昭和28)年8月に機械科の講師として着任した。学生数は機械科40名、電気科40名であった。専任教官は機械科に豊澤教授と私の2名、電気科に渡辺教授、鈴木助教授、水野助手の3名、それに共通科数学専門として平野助教授、総勢6名であった。

豊澤先生は工業デザインを専門とされ、楽器、自動車、工作機械の企業からの相談を受けられることが多く、私は何度か先生のデザインを拝見して、その見事さに驚嘆したものである。

当時の工短の学生は工短設立の趣旨に沿い、殆ど会社、工場の若い従業員または、工学部の常勤職員が非常勤であっ

た。昼間は働き夜間は大学に来て勉強するパワーを持った若者たちであった。勿論私も若年であって、ちょうど彼等の兄のような気分であって、彼等も遠慮なく私の自宅に来て酒を飲むことが多かった。その一人は酒がまわると一枚のハンカチを取り出し、Hな手品を披露した。

私の講義の受持ちの中に機械製図があった。これは「学校製図」であるので困った。私は航空学出身で卒業直後から海軍にとられ、ペラ研で飛行機のプロペラの設計ばかりやり、終戦後は小会社の事務ばかりやり、工短着任までの約十年は機械から遠ざかっていた。戦時のプロペラの設計は急を要するので、「学校製図」のように墨入れはしない。固い鉛筆の芯を尖らせて中型コンパ

スにつけて、これ一つだけで製図用紙の上に直線も円弧も曲線も描くのである。こんな私に「学校製図」を教えられははずがない。此の事情を学生に説明して了解を乞うた。すると「そういうことをかくさずに云う先生は偉いよ。」と野次が飛んだ。学生に課した製図のテーマに自動車用のジャッキを選んだと記憶しているが、学生各自が独特の工夫をするように注文をつけて様子をみた。ところが都合がよいことに、会社工場に勤めている勤労学生等の中に多数のホンダ、スズキの設計製図を専門とするものが居て、何も出来ない素人学生に懇切に指導してくれた。

(『勤労者教育43年の歩み』静岡大学工業短期大学部 1997年より転載(抜粋))

工業短大開学のころ

中村喜十郎(31JM)

昭和28(1953)年の冬、予想外のことが起きてしまった。当時の総理大臣の暴言で国会が解散され、夜間の工業短期大学部の新設ができなくなった。そのため、次の国会で認可されることになり、4カ月待って8月1日に開校されたのであった。

われわれ第1期生の入学式は昭和28年8月1日、授業開始は2日、真夏のことであった。当時の教室は南門の東側にあり軍隊の旧兵舎で60ワットの薄暗い発熱電球がついていた。夜間の授業は真夏の夕日に照らされ、暑く無風状態で耐え難かったが、全員が前方の席に着き汗だくになって聞き入っていた。夕食直後の者、仕事帰りに駆けつける者、遅刻する者など種々雑多な条件・事情があって授業の始め頃は気を引き締め眠気に堪えた。しかし居眠りは我慢できなかった。

秋になって、旧浜松工専の跡地から移築した木造2階建ての短大1号館が出来上がった。この校舎は蛍光灯が数多く取り付けられていた。初代の専任教官だった豊澤先生はまばゆいばかりの明るさに“自衛隊浜松基地の飛行機が飛行場と間違えるかも”と冗談を言っていたことが今懐かしく思い出される。

工短の専任教官は数人のみ、ほとんどの講義や学生実験は工学部の教職員が担当していた。入学時の同級生は定員40名に対して55名だった。学生の大部分が昼間勤務し、数人は学内の職員または学生アルバイトであって、他の数人は新高卒者だった。年齢的には15歳ほどの差があり、広範囲にわたっていた。やがて、仕事の関係や自己の都合で休みがちの者が増え、進級遅れや休学・退学が増加しつつあった。3年後の卒業時には36名となり、1年後、2年後には更に数名が卒業していった。

私は春から市川先生の水力実験室に学生アルバイトとしてお世話になり、卒業

まで続いた。豊澤先生がデザインの専門であったことや私も製図が好きだったことから、3年時の設計製図は任意課題を選び“餅つき機”を設計製図した。

卒業と同時に短大機械科の助手に採用して戴いた。そして柳沢先生の御指導の下で3年生の設計製図を担当した10数年の一時期は工業高校卒の勤労青年が8割以上を占めていたことから、かなりの難題を学生に課したこともあり、“工学部よりレベルが高いのでは”と工学部職員の同級生に言われたような気がする。当時の学生には大変苦勞をさせた。それが良かったかどうかかわからないが、話の一つになろう。

(本記念誌のための書下ろし+『勤労者教育43年の歩み』静岡大学工業短期大学部 1997年より転載(抜粋))

環境の変化には逆らえない

元主事 影山静夫

新制の静大工学部に、工短が併設されたのは、丁度学部1回生が卒業した1953(昭和28)年であった。1949(昭和24)年にスタートした工学部は、其の前年に募集を止めた旧制浜松工専に比べ、甚だスリムな、学科も学生定員も半分以上のもので、場所も旧高射砲連隊跡の現在地であった。

当時は、太平洋戦争のお陰で、都市の殆どが灰燼と化し、自由と平和を獲得したものの食べる事が精一杯で、働く職場も皆無に等しい状況であったからである。其の内に、世の中も落ち着いて、産業界も活気付いてくると、技術者の不足が目立って来たのは、当然と云うべきであろう。そこで、地元企業スズキ、ヤマハに校舎を建てて頂いて工短スタートと相成った次第である。入試問題も、工学部より難しいという評判で、実質学部と同等かそれ以上の学力をもった優秀な新入生を選抜して、スタートラインについたまでは、甚だ順調かに見えたが、ピストルが鳴ったの

は、何と半年も待たせた9月の事であった。国会の所為で、教育軽視も甚だしい。あれから半世紀たった現在も改善されていない様であるが、責任は国民なのか、政治家なのか真剣に考えて、速やかに改めるべきではなからうか。

産業の復興による電力不足を予測して、佐久間ダムを手掛けたのも此の頃で、工短の1回生が卒業した1956(昭和31)年にダムも完成したと思う。翌年の1957(昭和32)年に学部精密機械工学科、続いて1958(昭和33)年に化学工学科、さらに1959(昭和34)年工短に工業化学科が矢継ぎ早に新設され、私も夜間の授業も持つ様になったお陰で、その学生の熱心さ・真剣さに自然に講義に熱が入る教師冥利に尽きる充実した時を過ごすことが出来た。此の頃の卒業生の目覚ましい活躍が目立つのも当然で嬉しい限りである。

私が大庭先生と石黒先生に誘われて工短に移った1972(昭和47)年頃、産業界も巨大化し、能率と利益追求一辺倒になり、昼夜3交代制、遂に公害の生産に至って、工短も変わらざるを得なくなって来た。一番最初に被害を被ったのが千葉大で、近くに石油コンビナートが出来て、学生の質が急変し、文部省と相談の末文系の福島大とで、4年生昼夜開校制Bコースの実験校を買って出たので、早速石黒先生と調査に行って、改めて環境の影響の偉大さに驚いた。

大庭先生が時々、「うちと徳島大が一番最後になる」と言はれていたが、結果的にBコース移行が^{しんがり}殿となったのは、何の因果であろうか。

櫻場学長の置き土産に1978(昭和53)年2月末に工短1号館が完成、其の翌年より主事に選ばれ、会議で各地の大学を訪れたが、皆んな環境の変化に悩まされていた。然し、各地で色々な人や風土に接する事が出来たのは幸いであった。

(『勤労者教育43年の歩み』静岡大学工業短期大学部 1997年より転載(抜粋))

情報工学科の増設

1973(昭和48)年には地元からの要望に応え、情報処理技術者の養成のために、情報工学科(学生定員40人)を増設するなど地域産業界と強く結びついていた(表2-1)。勤労学生が多く、浜松市役所やスズキ、ヤマハといった地域の主要組織・

産業からの通学者が多く見られた。授業は午後5時30分から8時55分までの2コマ（途中5分間の休み）で、「学生たちは昼間の勤労の疲れも見せず、希望に満ち目を輝かせて授業を受けた」という。

運営は開設当初の主事(部長)は工学部長が併任する形であり専任教員は3~9人と少なく、1966年までは工学部教官が加わっていた。1966年以降は、専任教員11~25人ほどで運営がなされたが、特に教育面については母体である工学部教官が全面的に協力していた。1997(平成9)年3月末日に閉学するまで、5000人もの卒業生を送り出した。

企業名	就職者数	機械工学科	電気工学科	電子工学科	情報工学科	工業化学科
ヤマハ	243	103	57	40	10	33
浜松ホトニクス	232	14	50	111	14	43
スズキ	166	112	28	4	6	16
ヤマハ発動機	149	104	26	4	5	10
本田技研	70	46	13	2	4	5
エンシュウ	61	42	11	5	1	2
静岡大学	53	20	10	9	4	10
浜松市役所	51	13	11	4	6	17
東海旅客鉄道	50	23	16	3	4	4
クラブ	45	7	13	5	1	19
NTN	36	26	6	3	—	1
旭テック	27	16	9	—	—	2
富士電気化学	27	3	10	5	3	6
フジユニバース	25	20	4	—	1	—
富士機工	25	18	5	2	—	—
三信工業	23	11	3	4	2	3
エフシーシー	20	16	—	—	—	4

表2-1 浜松周辺への工業短期大学部卒業生の就職先(～1997.3)

出典：勤労者教育43年の歩み



工業短期大学部
旧1号館(左)と2号館(右) 1976年
静岡大学の五十年写真集

Column

閉学に想う

工業化学科 山田恵敏

私が工短に初めて足を入れたのは、1961(昭和36)年4月である。工短C科第三回生としてである。それから今日に至る36年間学生として、また職員として工短の姿を見続けてきた。その母校である工短が、勤労者教育の使命を果たして閉学になることは、他の誰よりも寂しく感じている。学生の気質も大変異なっている。昭和30年、40年代の学生は、殆どが、ハングリー精神むき出しで、屋間部の学生に負けたくない思いが人一倍あったように思える。しかし、最近では、経済成長で生活が楽になったせいか、いかに楽をして単位を取得し、学卒としての証だけを求めている学生が、私の目に多く入ってくる。

1969(昭和44)年に工短の職員に迎えていただき、後輩のよき相談相手、指導者として一人でも多く立派な技術者

として社会に出したいという気持ちが強かった。そこで、小野先生との相談の結果、他の工短より先に赤外線吸収スペクトル、NMR スペクトル等の最新の機器をふんだんに取り入れた実験を実施し、企業で即戦力として対応できるように指導してきた。これも、私自身が工短出身ということもあり「後輩たちには…」の思いが強かったせいかもしれない。こんな私の気持ちをC科を巣立っていった卒業生の何割くらいが理解してくれていたかは定かではない。(『勤労者教育43年の歩み』静岡大学工業短期大学部 1997年より転載(抜粋))

工短での思い出

鈴木じつ子税理士事務所

鈴木じつ子(旧姓矢口)

(昭和46年卒業・工業化学)

入学式の日、確か小雨でした。佐鳴

会館で記念写真を撮りこれから一緒に勉強していくのだと思いました。女子の入学者は、同じ工業化学科の吉名さんと私の2人だけでした。工短全校で上級生の大石さん・浅井さんの合わせて4人でした。四半世紀も前の事とは言え、今とは隔世の感があります。又クラスの半分近くは、社会に出てもう一度勉強したいという人達で年上の人が多かったです。私と言えば、商業科を出て就職が決まっている中での受験でした。それにしても何故工短なのかと先生・友達にも聞かれましたが、自分ながらよく合格したものと驚きました。当時、地元で働きながら学べる環境が今よりも厳しく選択の幅も狭く、通学の不便さも有り、自分自身の意思が強くなければ勉学を続けるには大変でした。けれども、青春時代が一番多感な年代を生協・教室・実験室で同級生に人生の何たるかを御教授願った事など、今の私の考え方のある大事な部分で

生きています。勉強の方は先生方・クラスメートには大変迷惑を掛けた記憶は今でも鮮明に記憶しています。高校からの分野違いと言う事と、私の努力の到らなさを唯々恥じるばかりです。今の仕事が税理士と言う事が、又皆に節操が無いと言われそうです。工短で学んだ勉強そのものが、今の仕事に直接的に関係は有りませんが、工短で3年間頑張って通学し、卒業したという事が税理士試験に挑戦した時に私なりに生かされたと思います。又、実社会で今日、こうして仕事を続けられ、皆に話が一応出来るのも、思えば、工短の同級生に鍛えられたお陰かも知れません。

(『勤労者教育43年の歩み』静岡大学工業短期大学部 1997年より転載(抜粋))

工業短期大学部の閉学にあたって 桑原 孝(昭和48年卒業・電子)

私が在学した1970(昭和45)年から1973(昭和48)年は、丁度、第1次オイルショックが起こり、日本の高度成長期の変局点であった時期でした。物価も3カ月毎に上がっていき、給与も在学3年間で約2倍ほどになった時代です。校舎も旧木造校舎と鉄筋校舎が両設され、短期大学部は木造校舎で授業を受けていました。

入学した動機は会社に対しての反骨精神からでした。たまたま初めて入社した会社が夜学に対しての理解が無く、入学以前から遅刻通学が予想されました。入学初日も遅刻で担当教官に「毎日、1時間限目は15分遅刻しますが宜しいですか?」と心配して尋ねたところ、返ってきた返事があっさり「ああ、いいよ!」でした。1ヶ月ほどたつて返事の内容が解りました。約半数の人達が5分から15分遅刻してきます。私は、自分だけでなく皆同じ境遇なんだと思いました。

早々、中古バイクを購入し、自宅ー会社ー夜学ー自宅のトライアングル通勤、通学が始まりました。しかし、「会社ー夜学」このルートが大変でした。浜松市内を南東より北西へ、約15km、それも1番混雑している時間帯に通過しなければなりません。出来るだけ信号機の無い、細い路地を見つけてはの通学でした。3年間に「あー、危ない!」と思ったことは数限りなくありましたが、幸い大きな事故を起こすことなく卒業出来ました。毎

日バイクで通っていると、通る度に同じ匂いのする場所、四季を通じて空気がいつも肌に暖かく感じられる所、逆にある場所だけ冷たく感じられる所などわかるようになってきました。今ではその頃感覚が忘れられず、オフロードバイクを4台も保有する自称「イーハトーブ・オフローダー」となっていました。授業中の思い出では、厄介だったドイツ語の追試で誰かが非常ベルを鳴らしてくれて危機一髪で助かったことや、出張で新幹線が遅れ物理実験が受けられず担当教官に頼み込んで1人で実験を行いレポートを出したことが思い出されます。

(『勤労者教育43年の歩み』静岡大学工業短期大学部 1997年より転載(抜粋))

工業短期大学部の思い出 静岡大学地域共同研究センター 友田和一(昭和52年卒業・機械)

瓦屋根で木造の、古い二階建て校舎が取り壊されてもう何年になるだろう。そんな校舎の中には、昭和初期のプレートのついた古い装置や測定器が沢山あった。大学という所はまだこんな使ってるのかと驚いちゃったね、まったく。男でも、夜九時頃ギンギンいう階段を薄暗い白熱電灯の下でレポートをもって行くのは薄気味悪かったな。レポートも提出日をはるかに過ぎた物をまとめて持っていったので、怖い思いは少なかったのが唯一の救いだけれど。

授業は午後5時半から7時までの1時間、7時10分から8時40分までの2時間だった。確か。名前だけは名簿の最後に長くあったけど、出席率が悪かったもので、正確には覚えていない。初夏はプール、秋は体育館とテニスコートが気になってしょうがなかったし、冬は「寒いな〜」で自主休講、時々スキー。今思えば、身体ばかりでなくて、頭も軟らかい時に少しは鍛えればよかったと残念無念、後悔してる、ホントだよ、ホント。

教室では関西弁でどなっていたおっさん、入った時から編入目指して勉強していた奴(オイオイ、和を乱したらあかんで、ホンマ)、麻雀やパチンコが忙しくてまるっきり顔を見せなかったつわもの、山形弁でしゃべってこちらがさっぱり理解できなかった奴など、いろいろ

いました。460××の学籍番号をもらった、それぞれが個性的な面白い連中だったね。もちろん、私は正統派標準語でお話していましたが。

楽しかった事、阿呆らしかった事等なんだ、かんだ、いろいろありましたが、何とか昭和五十二年の春、卒業できました。

(『勤労者教育43年の歩み』静岡大学工業短期大学部 1997年より転載(抜粋))

短大生活で学んだこと (株)三宝化学研究所 山本真巳子 (平成4年卒業・工業化学)

私にとって、工業短大に通った3年間は、それまでの生活が変わっただけでなく、私自身も大きく変わった時でした。一人暮らし・昼間のアルバイト・夜の授業。全てが新しい体験でしたが、私にとっては決して楽しいことばかりではありませんでした。

ほとんどが男子生徒という中での授業も、初めは心細く、不安でした。しかし、次第に男女問わず会話ができるようになり、友達もできると、学校だけでなく、一人暮らしの不安も無くなっていきました。

友達との遊びや行動も、高校までとは全く異なりました。皆、仕事があるため、授業が終わってから遊びに行くことがほとんどで、夜景や海を見にドライブに行ったり、ボーリングに行ったり、週末ともなれば、一人暮らし者の部屋に集まって飲んだり、明け方まで話したりと…。仕事と勉強の後で、よくやっていたなぁと今は思います。

しかし、1年半が過ぎる頃になると、授業の違いや、レポートの作成で、それまでのように友達と会う機会が減っていきました。それと同時に、1人での時の寂しさが身にしみて感じるようになり、親元での生活が恋しく思う事もしばしばありました。一人暮らしをして、親や家族の有り難さ、友達の大切さが良く分かったような気がします。また、同じようにつらい思いをして頑張っている人もこの学校には多くいたからこそ、私もこの生活を続けることができたと思います。

3年になって、就職の厳しさも体験しました。超氷河期といわれる昨今の始まりの頃でしたが、それでも学校宛

に届く、企業からの募集の中には、女子の募集もあり、私の望んでいる職種のものもありました。でも、親元を離れての女子の就職となると話は別で、ほとんど無い状況でした。せっかく頑張って勉強してきたのだから、やはり学んできた事を生かせる仕事に就きたいと思い、先生方の多大な協力のもと、

いくつかの会社を当たった末、ようやく今の会社に入ることができたのです。会社からの内定を頂いた時は、今までの頑張りが報われたようで、本当にうれしかったです。

楽しい事よりも、むしろつらい事の方が多かった3年間だったと思います。しかし、あの時いろんなつらい思いを

したからこそ、今は何にでも頑張っていけるような気がします。勉強だけでなく、社会の厳しさも学び、自分自身強くなる事ができた学生生活だったと思います。

(『勤労者教育43年の歩み』静岡大学工業短期大学部 1997年より転載(抜粋))

工短教官の研究

始めに研究環境についていえば、それぞれの学科の規模は小さく、卒業研究や大学院生がいない点では良好とは言えないだろう。しかし、1981(昭和56)年版、1982(昭和57)年版静岡大学要覧に掲載されている、直近5カ年間の発表論文(5編迄)のリストを見れば、工短教官の研究活動が学部教官と劣らず活発であることがわかる。以下に工短教官の研究テーマの幾つかを列举する。

・機械科「アルミニウム合金の切削仕上面の光沢度」

「ピアノ打弦力曲線の実験的研究」

・電気科「直流機の無火花帯の一解析法」

・電子科「磁気センサー InSb」

・化学科「金属ナトリウムを用いたフェノール類の選択的オルソアルキル反応」

・情報科「企業が期待する情報科学教育」

一般教育等の物理系教官は電子計算機を用いて金属間化合物中の電子状態や半導体中の電子の挙動を研究しており、当時既に計算機科学の時代になったことを示唆している。

工短の共同利用装置は閉学時「電子計算機」、「振動騒音解析装置」、「光物性測定装置」、「電子顕微鏡」、「蛍光時間分解測光用光励起システム」であり、利用者に偏りはあるもののよく利用されていた。

閉学までの20年間に、派遣された在外研究員は長短期併せて6人を数える。また、内外を問わず国際会議に参加する教官も多かった。



門標 1996年

勤労者教育43年の歩み



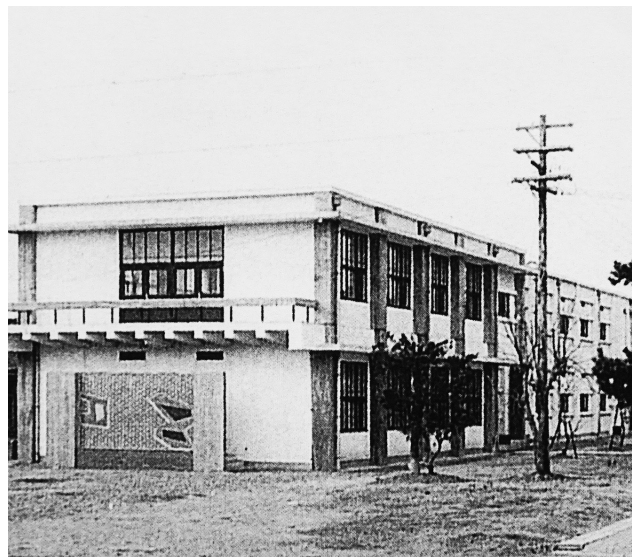
旧工業短大1号館 1953年

勤労者教育43年の歩み



工業短大1号館(右) 2号館(左) 1978年3月完工

勤労者教育43年の歩み



竣工間もない2号館 1960年

勤労者教育43年の歩み

お互い、あの頃は若かった

元情報工学科教員 吉田敬一
(元静岡大学情報学部教授)

夜学生は経済的な理由か、学力的な理由から昼間部を選べなかった人が多い。だから、昼間部の学生に対して、複雑な感情を持っている人が少なくない。工短の授業は、教官数の関係で、講義の一部を工学部の教官に依頼していた。そうした教官の一人が授業の中で、時間的な制約からか、教科書を見ながら「ここは、工学部ではやっているが、短大では省略する」といったのを、その教官の日頃の雰囲気から、学生たちは敏感に「(内容が高度なので)君たちには理解が難しいだろう」と解釈したらしく、屈辱と寂しさを滲ませた一幕が、ゼミのコンパの場で披露されて、周囲に寂しい風が流れたこともあったが、いまとなっては懐かしい思い出の一コマになった。

工短の学生は、卒業後、元の職場にとどまった人、ソフト会社に転職した人、四年制に編入した人など、さまざまだが、かつての複雑な思いや屈辱をバネにして、学部へ編入、大学院に進学し、博士(工学)の学位を取得した人ふたり、ソフト会社を興し自社ビルを建てた女

性二名、連名で出した学会論文が認められて、大学校の情報の先生に就任した女性など、賀状を通して卒業生の活躍ぶりを知り、あの頃のお互いの若さを思い出すのだった。

工短・情報工学科は1973(昭和48)年創設以来、1997年3月廃止までの24年間、地元技術者の夜学の情報教育に尽くした。卒業生の活躍の場がどこであろうと、その活躍は、母校・工短への最大の贈り花である。「一隅を照らす、これ国の宝なり」(佐藤一斎「言志四録」)。

工短棟の思い出

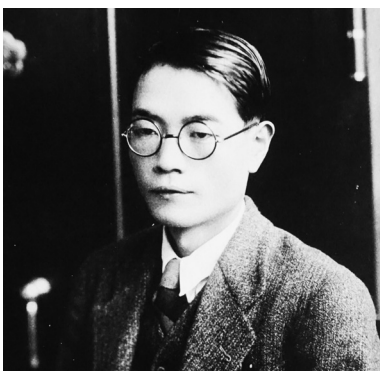
電気工学科 立岡浩一
(現静岡大学工学部教授)

私が工業短大に就職したのはおよそ十年前になります。この間、工業短大の職員の皆さん、先生方には大変お世話になりました。学科内で多大な御指導を頂いたのをはじめ、駅伝大会や工友会のソフトボール大会に工短チームとして参加し楽しい時間を過ごさせて頂きました。授業が夕方から夜にかけてであるという事もあり、まるでキャンパスに住みつき、アパートには風呂と睡眠に帰るだけの生活でした。それで

か工業短大にはとても親しみをを感じるようになりました。工短の建物は高く、屋上からの景色は格別でした。四方を遠くまで見渡す事が出来、季節で変わる山の木々の色、冬の遠くの山に積もる雪など、加えて空気の澄んだ日には富士山も見ることが出来ました。南の方向に見える夜景も悪くないし、夏場には方々の花火大会を見通すことが出来ました。

授業においての思い出はやはり電気実験です。2年生には基礎的な実験を、3年生には簡単な製作実験を担当しました。この製作実験は後期に行いましたが、秋の夜風を感じ、虫の声を聞きながらの授業になかなかの風情を感じたものでした。教室からは生協が見えますが、そこには昼間のような騒がしさはなく落ち着いた雰囲気がありました。授業の合間や終了後には、生協の外灯の下に数人が集まって何やらワイワイガヤガヤやっているのを見かけました。昼間は仕事、それが終われば工短の授業、それが終わってからやっと友達との語らいの一時だったのでしょう。よくがんばるものだな、と考えたものでした。

(『勤労者教育43年の歩み』静岡大学工業短期大学部 1997年より転載(抜粋))



堀井隆 教授 1938浜高工アル(電気)

4 | 電子工学研究所

研究所の発足

静岡大学附置電子工学研究所(電研)は1965(昭和40)年4月に誕生した。電子物理、半導体、真空管、回路、超高周波、材料の6研究部門から成り、初代所長は堀井隆教授であった。発足時の定員は、教授6、助教授6、助手12、事務官2、技官2、雇員18、傭人3の49人であり、新築の庁舎は現在の城北キャンパスに建築された(延べ面積3641m²)。

電子工学研究所の開設にあたって

堀井 隆

このたび四月一日から静岡大学附置の電子工学研究所が創設されました。もっとも創設とはいっても、従来の工学部附属の研究施設が母体となってい

るので、昇格といった方がぴったりするようです。

研究所になると、予算の規模も定員も増え、また大学に附置されるので事務部も置かれて、学部と並んだ取り扱いを受けることになります。現在、国

立大学の工学系には十五の附置研究所がありますが、何れも旧制の大学に設けられていて、新制大学としてはこの研究所が最初のものです。

研究所は、戦後ずっと広沢町の昔の応化の戦災を受けた建物を使っていました

が、昨年から追分町の工学部敷地内に建設にとりかかり、この三月末日に延べ約1,000坪で、新築の研究所が完成し、名実ともに研究所らしくなりました。

この研究所は、御承知のように、高柳先生が大正の末に着手されたテレビの研究が発端になったもので、歴代の校長先生や教職員の御援助によって、戦後昭和25年に工学部附属の電子工学研究施設になりました。その後も歴代の学長先生のご尽力によって漸次その規模を固め、特に渡辺学長が来られて

からは急速に充実されて、その並々ならぬ御力添えによって、このたび研究所の誕生を見た次第です。

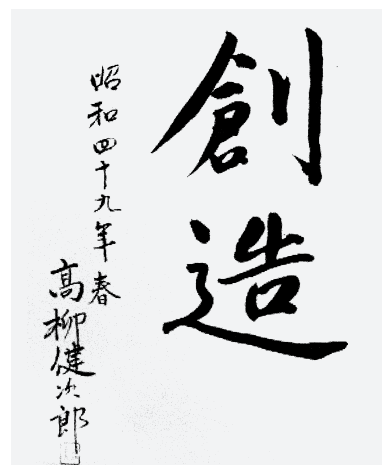
現在研究所には6つの研究部門があります。すなわち(1)電子物理、(2)半導体、(3)真空管、(4)回路、(5)超高周波、(6)材料で、テレビの研究が発端になっていますので、電子工学の中でも特に光を電気に変える光導電材料、電気を光に変える蛍光材料や半導体レーザーなどの研究とその応用が中心課題になっています。

電子物理や半導体では、これら材料を物性的見地から、材料では化学的見地から調査・研究しています。真空管では光導電材料を応用したテレビ撮像管の研究が、回路では撮像管や半導体レーザーの応用が進められています。超高周波ではマイクロ波における半導体素子の特性と応用について研究が行われ、この他半導体部門を中心として、研究所全体で微小集積回路の研究を進めています。

(『佐鳴』 第31号、1965年)

電子工学研究所の前身は静岡大学工学部附属電子工学研究施設(1950年設置)であり、当初は、真空管研究室、回路研究室、材料研究室の3部門から成り、イメージ・オルシコン(撮像管)研究や光導電材料を用いたビジコン(撮像管)研究で我が国最先端のテレビジョン研究の拠点となっていたが、1954年には電子物理部門が増設される。これらの研究を率いた堀井隆教授は、中日文化賞(1953)やテレビジョン学会丹羽高柳賞(功績部門、1953)を受賞していた。1960年には、東北大学で工学部長を務めた半導体研究の第一人者、渡辺寧教授が静岡大学第4代学長に就任し、その尽力の結果、1961年に半導体部門、そして1964年には超高周波部門が増設され、これらが電研に受け継がれることとなった。

電研は、先ずテレビジョンの研究が中心となり、次第に電子工学の新分野に、そして半導体を用いた光電子工学に研究の中心を移していくことになる。

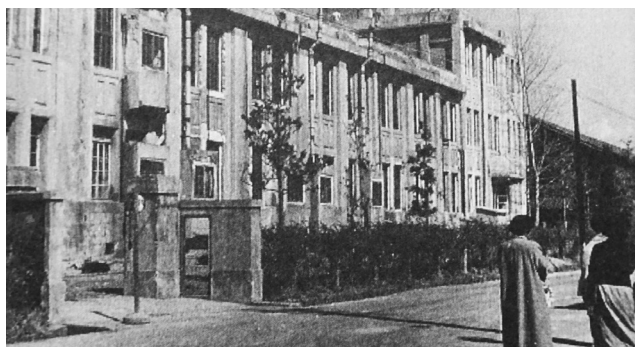


高柳健次郎の書



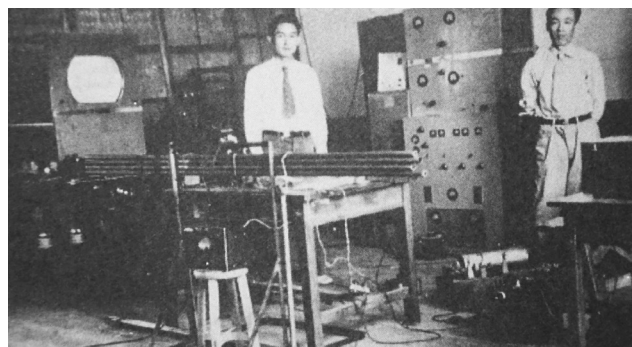
教職員(1965年)

電研50年史



電子工学研究所(1950年発足頃)

電研50年史



電子工学研究施設のTV実験局(1953年)

電研50年史

第2節 研究・教育と学生生活

1 | 研究の特色

▶『工学部研究報告』の発刊

1949(昭和24)年に発足した静岡大学工学部は、機械工学科、電気工学科、工業化学科の3学科の他に、繊維工学教室、物理教室、数学教室、教養教室、電子研究施設の5部門を加え、教授15人、助教授10人、講師5人、助手12人、総勢42人で研究・教育活動が始まった。翌年度の3月には、工学部の研究活動の成果をまとめた『工学部研究報告』が発刊された。当時の井口常雄静岡大学学長は、この報告書に「発刊の辞」という一文を寄せ、「現状の学問研究はきわめて不自由困難なるにかかわらず、よくこれを克服してここに研究成果の発表をみるに至ったことは教官各位の努力の結晶であり、深く感謝の意を表する」と記す。また、当時の江見工学部長も「研究報告後記」で、専門学校当時から我々は基礎研究に関心を抱き、Developmentの領域の研究にも手を伸ばしているの、これからの成長を見守ってほしいと結んでおり、教官が研究活動に高揚している様子がみえる。

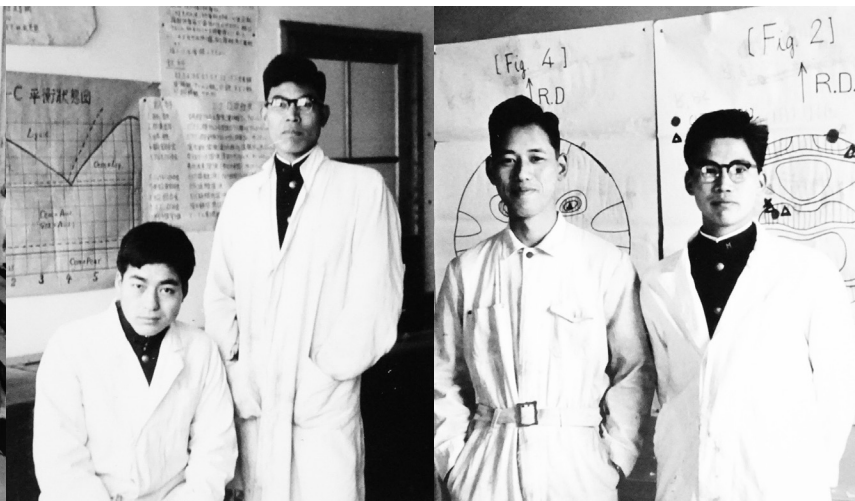
研究報告第1号には、機械工学科、電気工学科、工業化学科、さらに物理教室、電子工学研究室の教授の他に新進気鋭の助教授、講師、助手から30編の研究論文が納められている。江見工学部長の言のように、工学部研究報告は、当時の研究活動の集大成を表すものである。その後1958(昭和33)年からは、オリジナル論文の掲載に加えて、学会発表した論文、講演、学会誌に発表した論文、書籍、特許などの成果も掲載し、『工学部研究報告』は、教官の研究活動を総括的に評価する資料となり、2002(平成14)年まで53年間発行され続けた。

静岡大学 工学部研究報告 第1号	
Reports of the Faculty of Engineering, Shizuoka University, Hamamatsu, Japan. No. 1	
静岡大学工学部 1950	
目次	
機械工學教室	
Shuttleの速度、加速度及びSweepが其等と及ぼす影響	鴨川部・木内郎 1
Shuttleの受ける反力源がSweepが其等と及ぼす影響	鴨川部・木内郎 5
金属の重量と地磁気への影響	井形 郎 7
表面処理剤等について一つの試み	戸 廣 13
鉄の表面加工方法とメカニカル量との関係	佐 省 17
真空ポンプにおける漏洩(第1報)	市川 常雄 22
時計歩調測定装置の一試案	木 内 郎 30
弾性体の振動減衰	木 内 郎 34
電氣工學教室	
振動機に対する電圧変動による人工波電圧	渡 尾 隆 45
全振動の電圧変動	渡 尾 隆 50
本機の電圧変動	渡 尾 隆 52
レベラ機の出力曲り部、分岐部の振動特性について	渡 尾 隆 55
同軸誘導線分岐部振動特性について	渡 尾 隆 60
レベラ機の出力曲り部、分岐部の振動特性について	渡 尾 隆 66
電圧変動の電圧変動	大 庭 政 77
工業化学教室	
本邦の炭素熱処理について	西 岡 新太郎 82
グロブ化反応のメカニズムについて	山 城 渡 志 87
(第1報) スルホン基の分岐化反応について	山 城 渡 志 96
スルホン基及びスルホン基中の炭素量の決定(第1報)	櫻 田 周吉 100
スルホン基及びスルホン基中の炭素量の決定(第2報)	櫻 田 周吉 105
誘電率を用いた分析手法(第1報)	鈴 本 幸 彦 110
誘電率を用いた分析手法(第2報)	鈴 本 幸 彦 115
電気伝導率を用いた分析手法(第3報)	鈴 本 幸 彦 120
電気伝導率を用いた分析手法(第4報)	佐 野 貴 125
電気伝導率を用いた分析手法(第5報)	佐 野 貴 130
物理學教室	
Covitationについて	分 島 隆 180

『工学部研究報告』1号



機械工学科の実習



1959機械工卒アル

■機械工学科の各研究室■



1958機械工卒アル



1958機械工卒アル



1958機械工卒アル



1958機械工卒アル



1958機械工卒アル



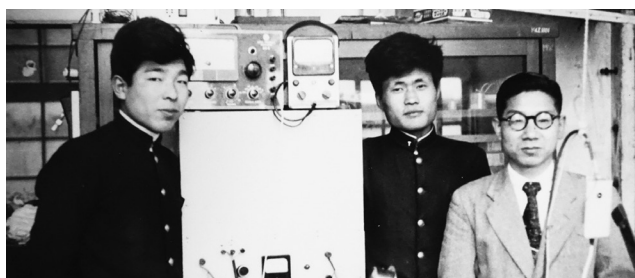
1958機械工卒アル



1958機械工卒アル



1959機械工卒アル



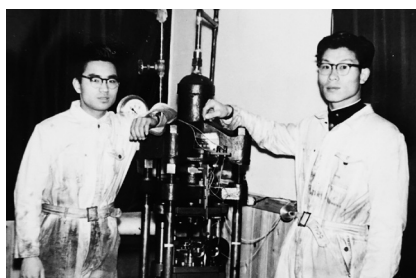
1959機械工卒アル



1959機械工卒アル



教員



実習中



工場で

1959機械工卒アル

▶ 旺盛な研究活動と大学院設置への展開



広沢にあった電研の建物



浜松キャンパス構内 1960年代
田尻賢治(40E)提供

図2-1は、『工学部研究報告』に発表された論文数の、1950年から1969年までの20年間の推移である。教官の研究活動を総括的に評価する「学会発表した論文、講演、学会誌に発表した論文、書籍、特許などの成果」は、年を追う毎に増加し、研究活動が活発になってきたことが明らかで、特に、1963(昭和38)年は、193件と前年の97件から大幅に増加している。1960年代前半は、戦後復興がなしとげられ「軽工業から重化学工業への転換」が始まった時期とも重なる。特に、1950年代後半から池田勇人内閣による「所得倍增計画」の推進とあいまって技術革新が活発に行われた時であった。

この技術革新の波は工学部にも押し寄せ、化学工学科、合成化学科、電気工学第二学科が新設され、「大学院工学研究科」いわゆる修士課程が1964年に設置された。修士課程設置は工学部の長年の悲願であり、地元代議士、静岡県、浜松工業会などを総動員して設置促進の運動を行ったと当時の櫻場周吉学部長が『佐鳴』(29号、7月号)の中で「大学院設置までの経過」として、その顛末を残している。大学院設置に合格できるかの現地調査の結果、「学長殿がご自慢されるだけあって、教官組織は全く立派である。ただ、施設がさみしく不十分である。研究設備はまだとしても学生のための実験設備が不満足である。」などとの講評があったと記されており、教官の研究活動は「自慢のもの」であったことがうかがえる。

その後の研究活動は、1967年になるとまた一段と活発になって、前年の177件から250件に飛躍的にアップしている。1967年は機械第2学科が新設され、1968年の工学部教官は、学部発足時の2倍強の104人の教官組織となっていた(図2-2)。

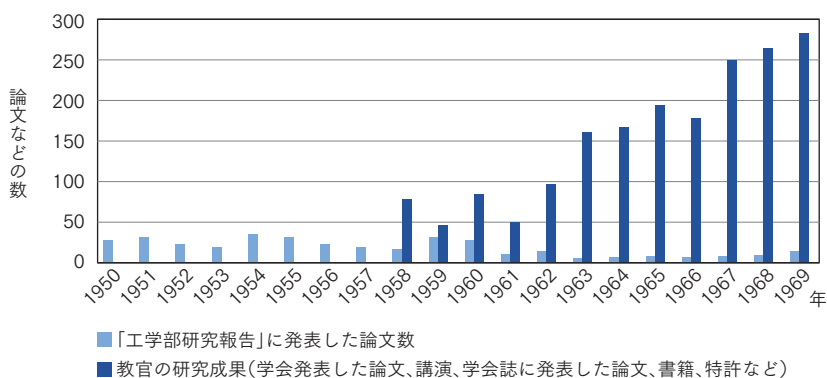


図2-1 1950-1960年代の工学部教官の研究活動の推移

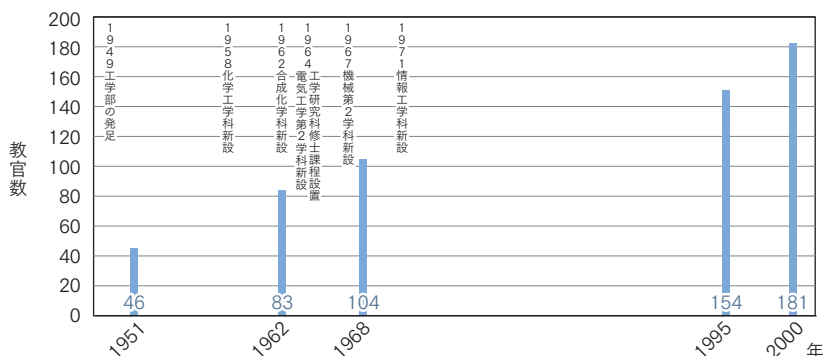


図2-2 教官(教授、助教授、講師、助手)数の推移

■1955年アルバムより■



学生食堂



講義風景



コンパ



授業風景



大学祭



コンパ



宴会時の集合写真



スポーツ祭



工場見学



校庭で



下宿にて



下宿にて



コンパ

2 | 浜松工業会

▶ 浜松高等工業学校同窓会 ◀

1923(大正12)年に開校した浜松高等工業学校は初夏に花が一斉に咲く関口バラ(ナニワイバラ)の生垣で囲まれていた。在学生全員が会員となる校友会が設立され、庭を有する生徒集会所まで用意された。1924年には、校友会誌の創刊号が発行され、2号会誌から『小鳴(佐鳴)』と名付けられた。1925年3月には臨時教員養成科59人が卒業し、応援歌3編が発表された。1926(昭和元)年には機械科41人、電気科42人、応用化学科37人が卒業した。この年創立開校記念式と展覧会が執り行われ、校歌「名高き史上の古跡のこなた」が作られた。

1927年3月、浜松高等工業学校同窓会が発足し、初代会長として川口徳三が選ばれた。会員名簿が発行され、また学生歌「青葉の木梢に」「うららに晴れし」「浜名湖に聴く」などが発表された。1929年には、浜松高等工業学校同窓会誌が創刊され、1943年の27号まで刊行された。第2代川口校長(初代同窓会長)は同窓会の主要な使命について「同窓生全体間の親睦一致を図ること」であると述べている。

浜松高工同窓会時代から全国に多数の支部が結成され、活発な事業活動を行っている。最も古い静岡支部は1928(昭和3)年に発足し、続いて1929年には東海・関東・台湾支部、1931年に京都滋賀支部、1935年に神戸・九州支部、1936年に仙台支部、1937年に浜松・朝鮮支部、1938年に大阪支部、1940年に奉天・大連支部が活動を開始していた。

1940年に、校歌が「科学の精神技能を磨き」に改定された。1944年には、浜松工業専門学校と改称され、1945年、短期間だけ本校を富塚町「西寮」へ移転したが、終戦後は、現在の城北3丁目に再移転した。



毎年5月に旧広沢キャンパスに咲く関口バラの生垣(現在の浜松市立高校)

▶ 浜松工業会の発足と本部・支部の事業活動 ◀

1949(昭和24)年11月に、新制大学「静岡大学工学部」の設置に伴い、浜松高工同窓会は「浜松工業会」と改称し、初代会長には伊藤淳一が就任した。翌年の1950年3月には、浜松工業会会誌を『佐鳴』と改め第1号を創刊した。1953年には、

工業短期大学部が設置され、その卒業生も浜松工業会に加わった。

浜松工業会の各支部は1947(昭和22)年、改めて関東・近畿・愛知・浜松・静岡・沼津・北海道・仙台・三重・松本・岐阜支部として、また、1952年に北四国・北九州の支部等が活動を再開した。

1956(昭和31)年には浜松工業会創立30周年記念事業が行われ、その募金により1957年9月に、佐鳴会館が建設され、浜松工業会の本部役員会と事務組織が設置された。本部役員会は会長・副会長と理事会(理事長と理事)からなり、事務組織が実務を担当して、本部のあらゆる事業を執り行っている。

1960年静岡大学工学部の開学10周年記念事業の一環として、TV発祥を記念するために高柳記念館の建設が行われ、1961年に落成した。



創立30周年記念事業による佐鳴会館 1957年9月 工学部70周年写真集



高柳記念館 1961年

工学部70周年写真集

Column

『佐鳴』に関する随想

櫻場周吉

『佐鳴』の第1号が発行されたのは1950(昭和25)年でありました。当時は元名誉理事長の大庭さんも若く、また大学には長くとどまることもなく学園を去られた高橋先生(0Σ1、初代理事長)も未だ健在な頃でありました。

会誌の題字「佐鳴」を毛筆で記されたのは江見節男先生(工学部長)の第10号(1955(昭和30)年)の揮毫が最初であります。知る人ぞ知るで、先生は能筆家で、先生の書いた短ざくや色紙をいくつか

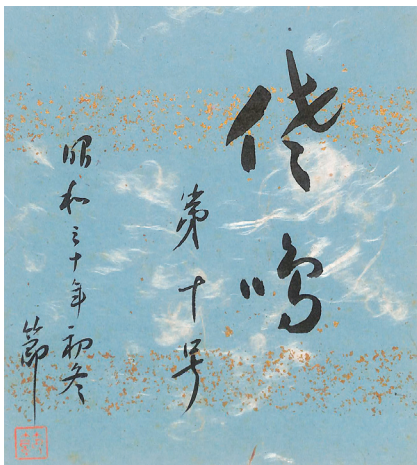
もっておられる方も多いと思います。先生は「佐鳴」を愛し、あのやわらかな名文でしばしば巻頭言を書かれております。『佐鳴』第9号(1955年)には「佐鳴の人々」と題して巻頭言を記されておりますが、その中に「佐鳴の人達が30年にわたって、お互いに助けあいはげましあってきたことは私のわずか10年の経験であるが何んと申しましてこの学園の力と魅力の源泉となっている」と語られております。

江見先生の後任学部長は西岡新太郎先生で僅か1カ年の任期でありました

が『佐鳴』第11号(創立30周年記念号)の題字を記しております。先生のあの独得の新太郎の署名は多くの古い卒業生の方には懐かしいものと思います。

私も第23号の題字をたのまれ、非常に困り果てて、井形先生(前学部長)や渡辺先生(前学長)の書かれた題字をまねて、紙を幾枚もぬりつぶしたことをおぼえております。

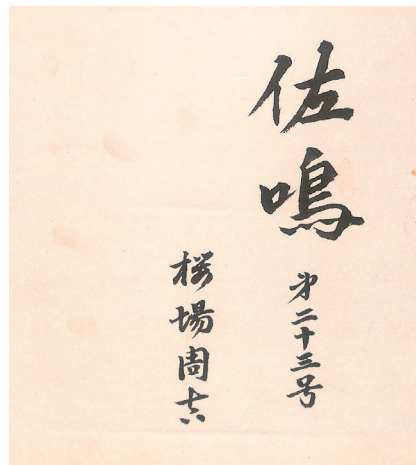
(『佐鳴』第50号 1974(昭和49)年12月号より)



江見節男



西岡新太郎



櫻場周吉

浜松工業会蔵

3 | 高度経済成長期のキャンパス

▶ 高い入試倍率と入学者の分布

東海道新幹線の開通や、東京オリンピック開催を含む1950年代の後半から1960年代は、日本の高度経済成長期であって、この時代を過ごした工学部学生にとっての浜松キャンパスは、活気に満ちた、充実した場所であった。

入試に関しては、全国的に工学部人気が高まったこともあり、特に1961(昭和36)年度は、入試倍率14倍と、これまでの最高値を記録した。受験生の内、1期校に合格した人が抜けるので、実質倍率は9倍程度になるのであるが、入試会場は浜松キャンパスだけでは足りず、北部中学、中部中学を借り、受験生の宿舎も浜松市内では足りず、弁天島のホテルや、民宿を利用したりする有様であった。翌62年度は約10倍であり、1978年度(2期校終了年)まで、高倍率が続いた。

2期校時代の工学部入学者の地域分布は、概略で、中国、四国を含む関西以西が40%、静岡県が30%、愛知県を含む中部が20%、関東、東北、北海道が10%であった。ちなみに、共通1次試験の時代である1980年では、入学者の60%強が静岡県、愛知県の両県出身者であり、2期校時代の全国区から地方区になったようである。このように、入試の高倍率を潜り抜け、特に関西方面から多くの学生が入学したことで、高度経済成長期に浜松キャンパス生活を送った学生は、優秀で個性的な学生が多かったのではないかな。

■ 発表会 ■ (1964精密工アルバムより)



沼津高専から精密工学科へ

沼津支部長 柳下福蔵
(44F・46MF)

私が1962(昭和37)年に新設された国立沼津工業高等専門学校(以後、沼津高専と略)機械工学科を卒業して静岡大学工学部精密工学科第3学年に編入学したのは、1967(昭和42)年4月のことでした。沼津高専の初代学校長・井形厚臣先生は京都帝国大学物理学科卒業後、浜松高等工業学校に着任され、同校在任中に文部省在外研究員として西ドイツで2年間の研究生生活を体験されました。1949(昭和24)年に新制静岡大学工学部が設立される際、「戦後間もない我国の産業を復興するためには西ドイツで学んだ精密工学の教育が必須である」という先生のご提言により新制大学に初の「精密工学科」が設置されたとお聞きしています。その精密工学科に編入学することになった私は、何か見えない糸で結ばれているような気がしてなりません。井形先生の遺訓「人柄のよい優秀な技術者となって世の期待にこたえよ」は創立60周年を迎える沼津高専の教育理念として現在も脈々と継承されています。

私が浜松キャンパスに編入学した際の、新入生歓迎館山寺駅伝、ゴール後の渡辺寧学長の名演説、大学祭の際の夜間歩行、佐鳴湖ボートレースのための早朝

練習等は、何事にも代えがたい青春の1ページであります。

同大学院修士課程精密工学専攻を修了後、母校沼津高専の教員となり、井形先生の浜松時代の教え子であり、当時の東芝機械(株)で活躍中の相良利夫氏、小池八衛氏、渡辺益雄氏、平野勤氏等と浜松工業会沼津支部で巡り合い、これら先輩方のご支援により「歯車ホブ盤の振動解析の研究」が飛躍的に進展するという大変な恩恵を享受させて頂きました。

産業基盤の「重厚長大」から「軽薄短小」への転換期に

下平美文(S45D・S47MD)

高度経済成長期の初期(昭和30年代)には高柳健次郎先生が目指した全電子式白黒テレビジョンが家庭に普及し始め、電気系の専門分野に構造的変革の兆しが見え始めた。1964(昭和39)年の東京オリンピックを期にカラーテレビが爆発的に普及し始めた。この現象は電気・電子工学分野の基礎学問の考え方に大きな変革をもたらした。信号情報量の急激な増大は、これに耐えうる機器の開発を促した。それまではラジオ、テレビなどの、信号の生成・増幅・伝送・受信のためのデバイスには親指大の真空管が主体で使われていたが、これ等は数ミリ角のトランジ

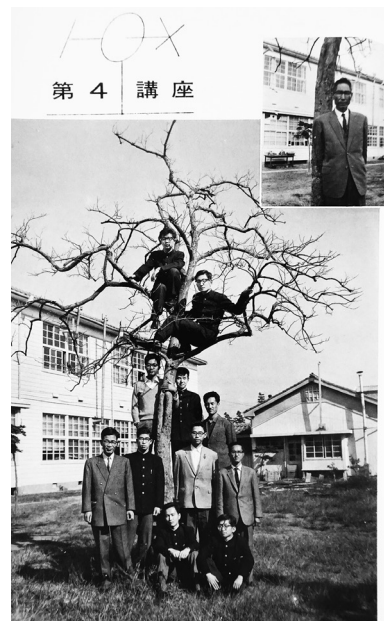
スタに置き換わるようになった。その中で最後まで生き残った真空管としては最大のカラーテレビ用のブラウン管も、十年もすると「壁掛けテレビ」実現の目標のもとで液晶テレビ、プラズマテレビ等に置き換わることとなった。機器の発展につれて社会インフラとしての、情報伝達の方法においてもマイクロ波通信からレーザー通信へ、トランジスタから集積回路へ、さらにはアナログからデジタルへと大変革を迎え、「軽薄短小」の時代に突入していった。

このような、大きな産業基盤技術の変遷により、電子系関連の専門科目は劇的な変化を強いられた。真空管や、マイクロ波通信の基礎と関連応用科目からトランジスタ・半導体、レーザーを使った通信等その基礎と関連応用科目へ大きく変化した。従って、これらを教える教員も学ぶ学生も、低学年で学んだ幾つかの主要基礎科目が高学年では役に立たなくなる現象に直面した。学生は何を深く学べば良いのか迷った。そして激変する産業構造の変化の中で、将来何が通用し、何が陳腐化するを見極めることの重要性を学んだ。「真理は一つでなく、他にもある」こと、「アメーバのごとく、自身の態勢を柔軟に変えてその時必要な物を取り込む」ことの大切さを個人の生涯の教訓として学んだ時期であった。



ゼミナール

1966電子工卒アル



電気工学第4講座

1966電気工卒アル



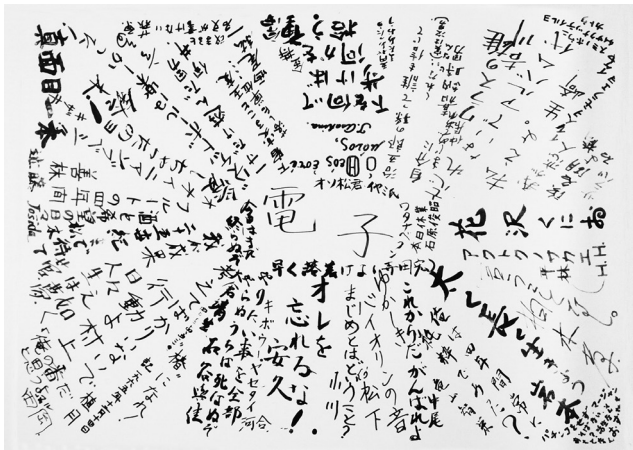
化学工学第1講座

1966化学工卒アル



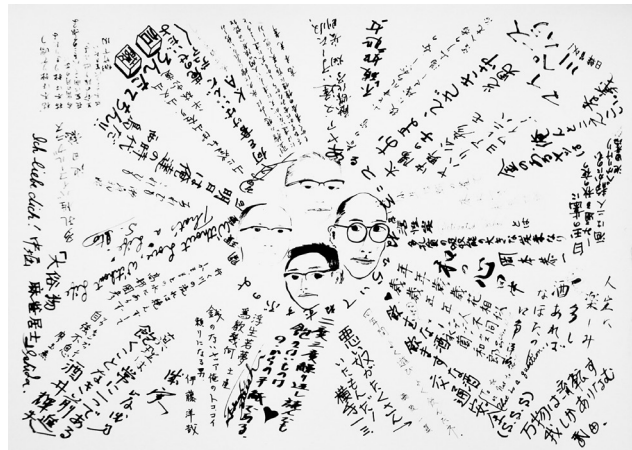
合成化学第2講座

1966合成化学卒アル



電子工学科寄せ書き

1966電子工卒アル



合成化学科寄せ書き

1966合成化学卒アル



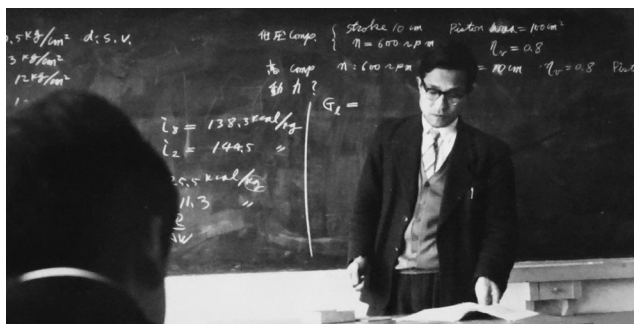
機械工学第1講座「俺達には明日があるんだぜ！」

1966機械工卒アル

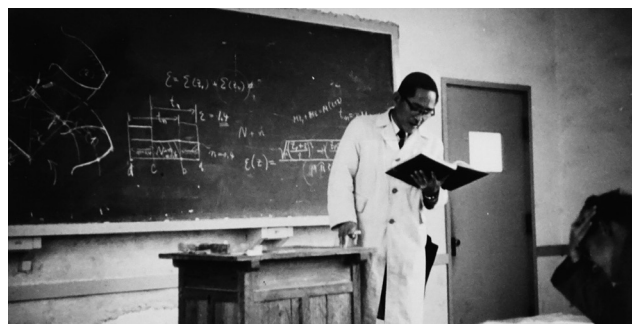
▶ ユニークな教師と授業 ◀

勉学に関しては、土曜日の午前中まで授業があり、語学は英語のみならずドイツ語もあって、しっかり勉強しなければ単位不足で留年の恐れがあった。しかし授業は面白く、ユニークな教師も多かった。例えば物理の鍋島寛先生は、授業開始直後、「基で私に勝てば、試験で落ちてでも単位を出すよ」など、学生を煙に巻くようなことを言いつつ授業を進めた。材料力学の鴨川寿先生は、授業に手ぶらで来て、サラサラと板書された。講義ノートは頭の中にあるようで、親しみをもって鴨シエンコと言われた(材料力学の分野で世界的に有名なチモシエンコにちなんで)。電磁気学の水品静夫先生は、米国で博士を取得後に帰国し教鞭を執り、最初の講義は全て英語で板書し、学生達は肝を冷やした。

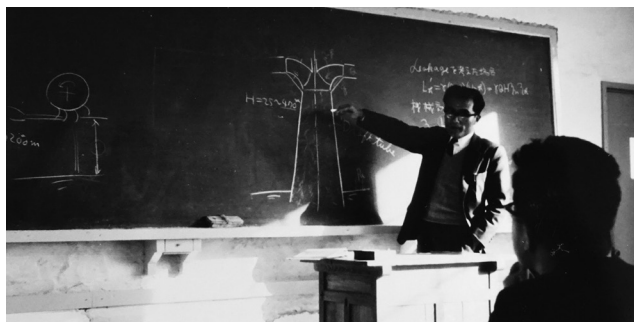
■ 講義する教師たち ■



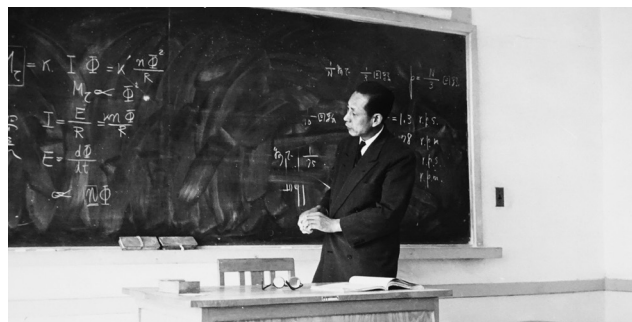
1959機械工卒アル



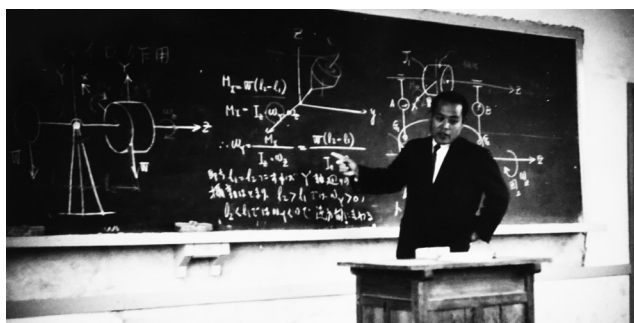
1959機械工卒アル



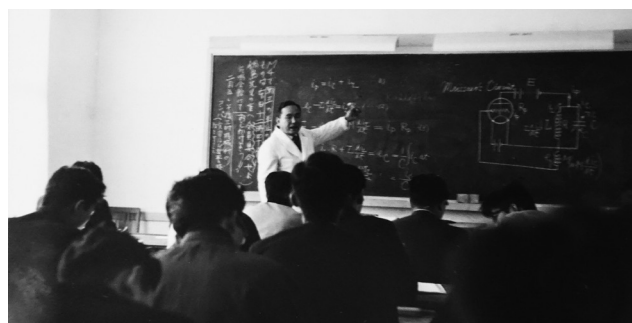
1959機械工卒アル



1959機械工卒アル



1959機械工卒アル



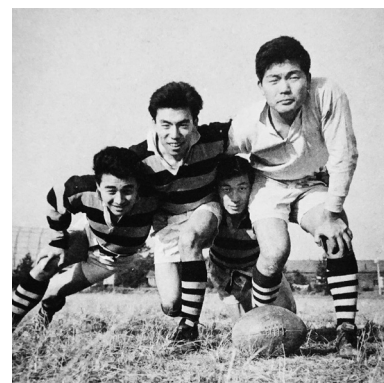
1960機械工卒アル

▶ 部活動を楽しむ ◀

ほとんどの学生は部活動を行い、クラス対抗のサッカー、水泳、ソフトボール、ボートレース大会等も開かれ、学生たちはキャンパス生活を大いに満喫していた。しかし、静岡大学統合移転決定(1974(昭和49)年～1975(昭和50)年)により、教養教育の2年間は静岡地区で実施されることになり、1、2年生不在の城北キャンパスの部活動の運営は困難に直面した。他方、静岡女子短期大学と部活を合同で開く機会が増え、生涯のカップルも幾組か誕生した。

▶ 大学院への進学と修士修了就職者の増加 ◀

1964(昭和39)年には、大学院修士課程が設置されたが、それに合わせて、博士課程のある大学院や外国の大学院に進学する人も増え、そのような人が母校に帰り、教鞭を執った。また母校に残り、博士課程のある大学で学位を取得した人もいた。工学部卒業生であるこれらの人の中から、副学長、工学部長、電



ラグビー部

1968機械工卒アル



興直孝 第13代学長(2007-2010)

子工学研究所長、工業会会長、理事長等、大事な役職を務めた人が多い。

科学技術庁審議官や静岡大学学長を務めた興直孝(67年卒、東北大修士)も、60年代の高度経済成長期の浜松キャンパス生活を過ごした一人である。

就職に関しては、大企業からの求人が爆発的に増えた時代であった。特に修士卒業生の就職率は大変よく、例えば電気系のある学科では、特定の電気系企業に対して、同一年度に4～5人の修士学生が就職することも珍しくなかった。このような状況から、修士課程への進学率が高まり、卒業予定の4年生の60%程度を占めることもあった。卒業後、企業等で社長、役員、管理職等、実社会で活躍した人は列挙することができないほど多い。

▶ 大学紛争の時代のなかで

1968(昭和43)年からの大学紛争に関しては、静岡キャンパスの嵐に比べ、浜松キャンパスでは小雨であった。1969年春、静岡キャンパス在籍の工学部学生は、大学紛争の影響で、授業時間不足のまま浜松に仮進級した。浜松での集中講義や未実施の期末試験の結果、7月には正式に進級することができた。1969年秋から1970年春にかけて、教授会と学生自治会との話し合いが頻繁に行われ、教授会と教授会構成員以外の階層(助手、事務官・技官、学生等)とが話し合う協議会の設立に進んだ。



ゼミ 金曜日はいつも13日だった

1966機械工卒アル



工場見学 三井精機

1964精密工卒アル



工場見学 トヨタ工機

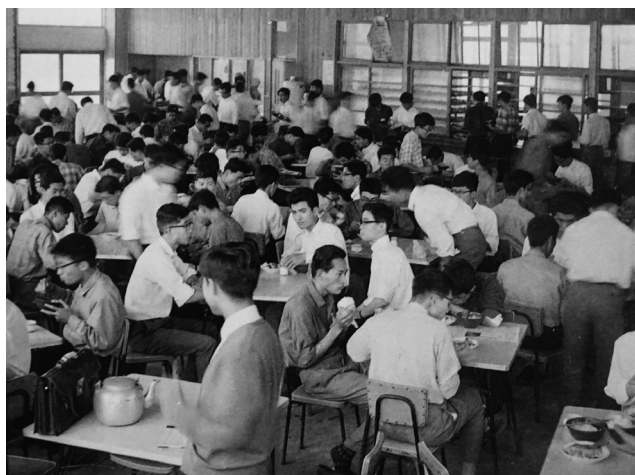
1964精密工卒アル



食堂 マズい飯も今は昔

1964精密工卒アル

■1966年卒業アルバムより■



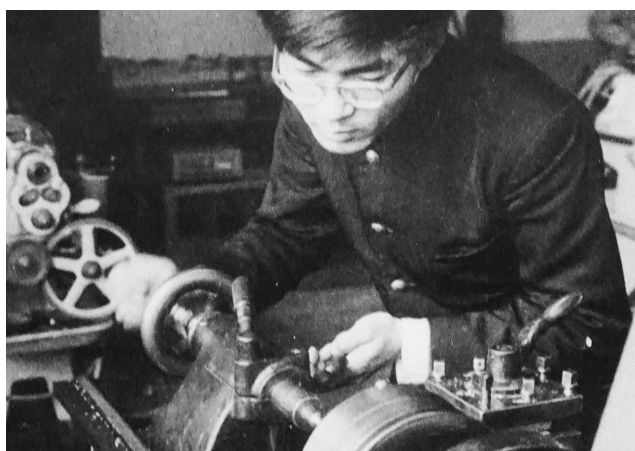
学生食堂

1966化学工卒アル



ノートと本位持ってこいよ

1966化学工卒アル



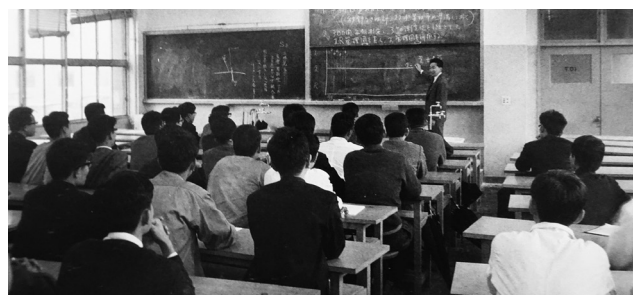
工場実習

1966電子工卒アル



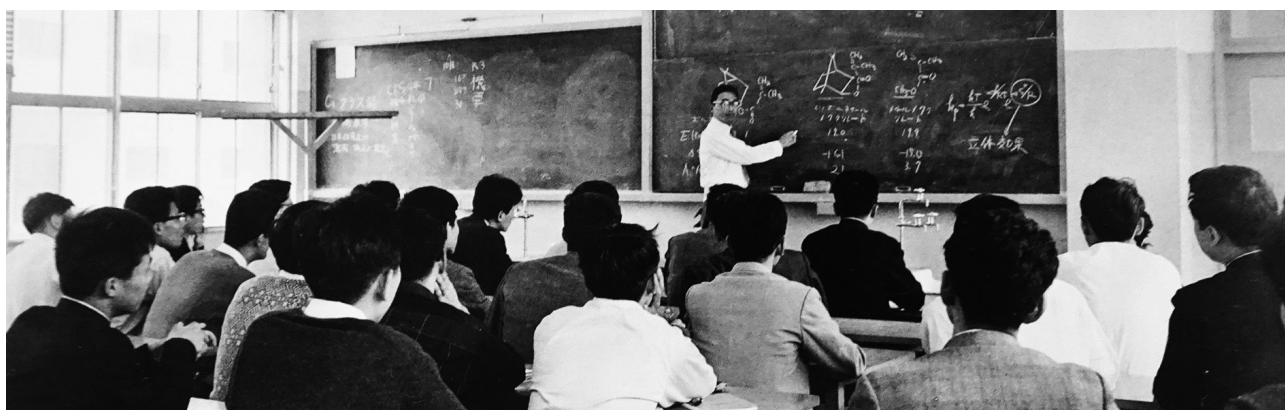
解らないのを承知で黒板を見るこのつらさ！

1966電気工卒アル



x - R chart と書きますと—

1966工業化学卒アル



問・ラジカル重合における生長反応速度におよぼす立体障害の効果を説明せよ

1966合成化学卒アル



ある日のゼミの風景

1966機械工卒アル

渡辺先生と工学部

櫻場周吉

私は、幸いにも渡辺先生が学長として在任中の1960(昭和35)年から1969(昭和44)年までの9年間を、評議員、学部長として先生と一緒できる機会に恵まれたものです。

先生は、東北大学の工学部長を経験されていまして、工学部関係のことは熟知しておられました。

学長としてのお務めの為にたびたび工学部を訪れる機会があり、あるとき、校舎の地鎮祭か、大学院の入学式か思い出せませんが、先生は、腰の神経痛の為に立居振舞が全く苦痛な状態であったにもかかわらず、車の中で横になって来られた時がありました。私共にはとても真似のできない事です。毎日多忙の先生がよく工学部に来られる事は、あるいは一つの楽しみだったかも知れません。特に、春、催される新入生歓迎の駅伝大会には、毎年楽しみにして出席されたものです。また、幾度か学生に講義をされた事もあり、その時の先生は全く情熱に満ちあふれ、講義の終わった後も大変嬉しそうでした。とは言うものの、工学部では先生に随分ご心労をおかけした事が多かったものです。1965(昭和40)年頃、工学部が

多人数方式の授業にふみきるかどうとかという時に、学生運動が今程激しいものではなかったのですが、学生の反対が非常に強く、説得力の弱い私は遂に先生に出馬をお願いしました。先生は、自ら学生の前で多人数教育の必要性を諄々と説明をされ、かなり激しく学長に詰寄る学生もあり、この時が、おそらく先生は初めての「学生団交」であったと思います。学生が「マスプロ」と言えば、先生は「マスプロではありません、マスエデュケーションです。」と繰り返し説明され、佐鳴会館ホールいっぱいの学生が熱心に耳を傾けておりました。当時、学生はストをやっていましたが、先生の誠意が通じたためか、ストにはならず仕舞いでした。しかし、学生の反対は別として、教官でたびたび検討を重ねた結果、遂に多人数教育方式は教授会としても見送ったのです。その頃先生は、文部省が設置した教育方法の改善に関する会議の委員長でしたから、工学部の決定には大変困られた事と思いますが、一言も我々学部が強要するような事はありませんでした。

先生は、我々教官の会議の席上にも来られた事が3、4回あります。1回は前述の多人数教育方式の必要性を、多くの

データを基にして説明されたときです。また、西部の一般教育関係を東部に統合する問題の説得のときもありました。西部の教育学部と工学部の教養課程を東部に移すその問題は大変難しいものでした。当時、市民や卒業生の移転反対は極めて強かったのですが、先生は、浜松市長や卒業生の代表者と会見され、統合移転の必要性を強調されたのです。先生の熱心な説得がなければ、到底実現しなかったと思います。浜松工専時代の卒業生も、先生と接し、先生の人格にすっかり魅せられた方が多かったようです。(『学報』100号(記念号) 1971(昭和46)年より)



渡辺寧 第4代学長(1960-1969)

1963機械工卒アル

4 | 駅伝大会・学生寮

▶ 駅伝大会

駅伝大会は1946(昭和21)年から再開された。1958(昭和33)年(第31回)は、鳥羽山公園がゴール地点であった。また、1962年から、館山寺がゴール地点となり、1965年から7区間となった。

1968(昭和43)年からは市営グラウンドがスタート・ゴール地点となり、都田を折り返し地点とした。1974年から、西寮グラウンドがスタート・ゴール地点となり、佐鳴湖西側緑地を一巡するコースとなった。1979(昭和54)年から、佐鳴湖東岸と西側緑地を一巡するコースとなった。1994(平成6)年からは、第4中継地点で折り返して同じ場所を2回走るコースとなった(巻頭写真及び資料を参照)。

静大祭パンフレット 1960年代
大学文書資料室蔵

■ 駅伝大会の様子 ■



1955アル



1960機械工アル

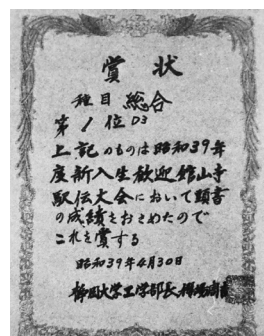


館山寺



あわてないで！

1966電子工卒アル



賞状

1966電子工卒アル



輝く全区走破独走態勢

1966電子工卒アル



一糸乱れず？

1966電子工卒アル



「参加スル事に意義アリ」だ！

1966化学工卒アル



オーイ早くベントウヨコセ！！

1966電子工卒アル



敵はいずこ？見えぬ敵を追って

1966電子工卒アル



1966電子工卒アル



敗れて悔なし

1966電子工卒アル

クラス対抗駅伝の思い出

吉川 榮(C33)

3年生の春、誰ともなく言い出して、先輩の広い下宿を借り、布団を持ち寄って1週間合宿をした。練習前には、当時新任の体育教官平沢弥一郎先生の指導で柔軟体操や手足を異なるリズムで動かす体操などを教えていただいた。先生は、前任の大学でラグビー部のコーチをしていたとかで、今思えばニュージーランドラグビーの前奏の“ハカ”ではないかとおもう動作と掛け声を教えてもらった。「ワーカンダーデドゥー ワーカンダデトヘー イッヒ オー イタリアー

ニャ」

今でも忘れない響きだ。合宿の効果もあって、1956(昭和31)年C3が優勝した。

翌1957年も優勝したが、当時の山田学長が我がチームに来て下さり、我々が獲得した優勝杯で祝い酒を飲んでくださった。その酒豪ぶりに驚いた。この学長の前で、我がチーム全員で、今は亡き足立君の振り付け指導で、“証城寺の狸囃子”の踊りをおどった。

閉会式で出された学部長寄贈の豚汁が、戦後の物資がない時代に育った我々には、非常にうまく、大会参加の楽しみでもあった。



優勝杯で祝い酒を飲む山田学長
1957.4.26

吉川榮提供

▶ 学生寮



山田良之助 第3代学長(1956-1960)

学生寮は、1935(昭和10)年6月に自啓寮(定員35人)が浜松高等工業学校北側に置かれた。設置計画は開校当時からあったが、経済的事情などで実現せず、川口第2代校長になってから、学校の敷地の拡張のために数軒の民家などを買い入れ、それを寮に充て、当初は1年生30人がこれらの民家に分宿したという。名前は懸賞付で募集され、1位であった「自啓寮」に決定した。これが1940年4月から至誠寮となった。この至誠寮は、1945年9月からは南寮となり、1947年3月以降は教職員の宿舎となった。また、1943年4月に西寮グランド北に建てられた西寮(定員40人)は、1948年4月から自啓寮(前述の自啓寮とは異なる)となり、1966年3月まで使用され、現在では遠鉄ストアになっている。1945年9月から1949年3月の間のみ、北寮(定員60人)が現在の浜松キャンパス内の北門周辺にあった。1954年4月に、現在の浜松キャンパス内の南東部分にあった既設の木造建物を曳馬野寮(定員32人)として改修し、1966年3月まで使用された。1966年4月に現在のあかつき寮(定員162人)が建てられた。

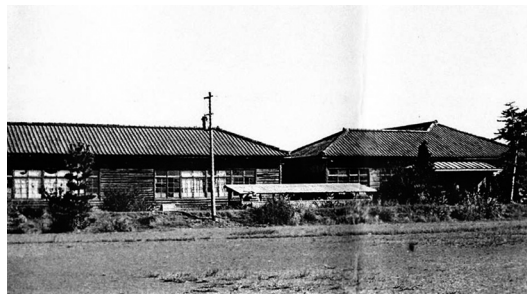


西寮の寝巻踊り

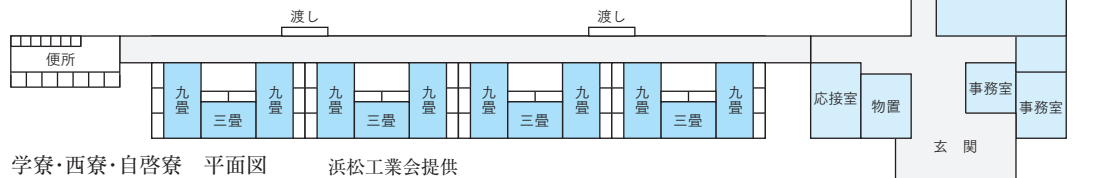
1966電子工卒アル



自啓寮 1960



自啓寮 1962



Column

自啓寮の思い出

堀内 幸(9M)

自啓寮は定員32名の小所帯なので、皆が兄弟のように仲良く接していた。60歳近くと40歳ぐらいの二人の寮母さんが通って来られて、毎日の食事を作ってくださった。朝はうどんだった。昼はどんぶり一杯のご飯とおかず一皿だけだった。焼きサンマー尾が上等のほうだった。夕食はプラス一汁された。もっとも美味しかったのは親子丼だった。1日70円の予算で3食を用意されるのは、大変なご苦労だっただろう。でも空腹がちで頻繁に、夜食として丼一杯の削り節ご飯(10円徴収)、夜中に駅裏の中華店で餃子、松菱百貨店近くの格安かつ丼、自分たちで作る白玉ぜんざい、いちご/果物コンパなどで補った。

自治寮なので大学から何の干渉もなく、寮長などの役員人事や毎月の寮費・予算、各種行事の計画実施などすべてを、寮生全員が出席する月一回の自治会で決定した。ほとんどの案件はほぼ全会一致で決まるように議論を尽くしたように思う。ただ一度だけ、議論を尽くしても新提案が決まらないことがあった。挙手同数となったとき、寮長が「新提案がいいんじゃないか、やってみよう。もし不都合が生じたら、そのときに再検討したらよいだろう」と言われた。私はそのときの寮長の積極性と柔軟性に貴重な人生訓を得ました。寮の南側は広いグラウンドだった。野球・サッカー・ラグビーなど楽しめた。秋ごろには1年生の提案でサッカー部を作りユニホームを着て寮内対抗戦を定期的にやった。

故郷から遠く離れた寂しさや不馴れな土地での新生活スタートの不安を吹き飛ばしてくれたのが、次々と続いた楽しい諸行事だった。数名の先生同席のもとでの公式新入生歓迎会(まだ18歳なのに飲酒初体験)、その日の夜中、太鼓・松明・大音声で叩き起こされ、パンツ一枚にされて天井板にぶつけられる胸上げ・ファイアストーム・どぶろく井酒と難問詰問攻めが延々と続いた本番新入生歓迎会、早朝グラウンドでの寮歌斉唱特訓、大井川まで往復する自転車旅行、伊良湖岬〜竹島〜三ヶ根山へのバス旅行、昼に素人演芸会を開いて近所の子供さん小母さんたちに楽しんでもらった後、夜に先輩OBたちとの酒宴へと続く寮祭、湯谷温泉・鳳来寺山への一泊旅行、近所のお嬢さんや大学の秘書さんたちを招いてクリスマスダンスパーティなどなど。

新しい原理法則をどのようにして見出したのか?を核心に迫って講義され、紛れもなく学生達にその発見プロセスを体験させたA先生が、毎週1回夜に来訪されて「自然哲学」の自主勉強会を開いて下さった。時あたかも60年安保の春、寮内でも每晚議論が沸騰していた。幸いにも外部からのオルグ侵入もなく、まさに自由啓発の心意気が守られていた。こんなことを契機に、世界・国家・社会制度・人生・宗教など広視野の思考議論を重ねる日夜が続いた。吉川英治の「親鸞」を一気読みし、中村錦之助主演の映画「親鸞」を見たのもその頃だった。人類はどこから来てどこへ向かうのか?人生の意義について悩みに悩んだが納得できる答えは得られなかった。だが、振り返るとよい

体験であった。

自啓寮1年目の思い出

持安昭正(43M)

1964(昭和39)年4月高校同期M君と岡山駅で「急行桜島」乗車、約7時間後浜松駅で下車。

三橋美智也ファンの村田寮長、入口部屋の出口さん、信州山岳の平林さん等々の先輩達!

寮母の伊藤さん、松浦さん⇒交代⇒宮本さよ子さん;朝・昼・夕食有難う御座いました。

同期入寮生は青森・新潟*2・石川・滋賀*2・和歌山・岡山*2・山口と地方組多し。

入寮数日後の夕食時「今夜は早く寝るように!」と異例の優しさ?でも…

草木も眠る丑三つ時 突如起こる関の声?は有名な歓迎ストーム!! 続く宴会では夏ミカンと薩摩芋をつまみに「どぶろく井」に嵌った蛾までも餌食に!(昆虫食の先駆け?)

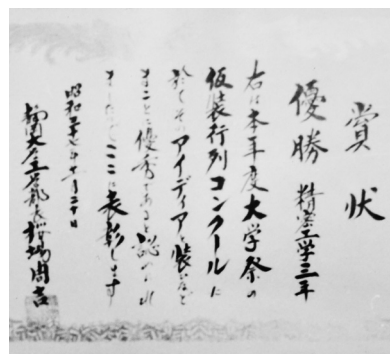
歓迎サイクリングの浜名湖一周;尉ヶ峰登山ハイキングコースの自転車担ぎは脱常識?!早朝のグラウンド整列寮歌コンテスト、週2風呂焚き当番とかで技を積み、寮3食制では午後から登校にて往復の無駄を省く行動を体得・・・大学との適度な距離感を享受?

夏休みの富士登山、佐鳴湖での和船漕ぎ訓練成果の観月競漕ではドボン者も、前期試験後の三重奈良旅行に続く寮祭での寸劇では化粧して母親役とか・・・社会勉強の自啓寮でした。

■ 仮装行列 ■



1960機械工アル



賞状

1964精密工アル



1964精密工アル



1964精密工アル



河上丈太郎 1963.11 第14回静大祭

1966化学工卒アル



ゆるる国会

1966化学工卒アル



すきだなあ

1966化学工卒アル



1966化学工卒アル



行儀の良い議員さんばかり

1966化学工卒アル



ナンダ、仮装してないと同じじゃないか

1966精密工アル



1955アル



勤 酒
勤 煙
勤 食



ウヒー!

1966化学工卒アル



市中行進

1966化学工卒アル

■スポーツ祭■



1964精密工アル



1964精密工アル



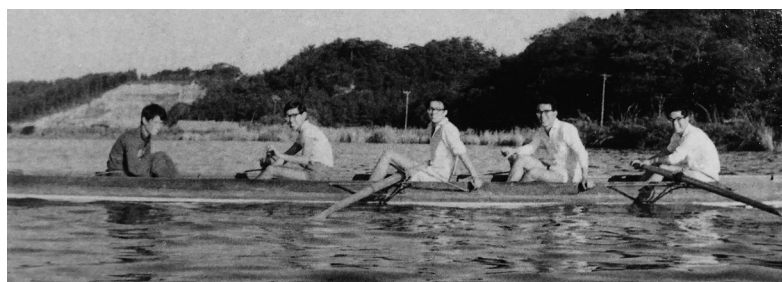
ボートレース 11月28日のファイブ・メンズ

1966化学工卒アル



ボートレース 丹羽、弟子丸、宮武、鈴木(国)、佐々木

1964精密工アル



ボートレース

1966化学工卒アル

■ 学生生活 ■



コンパ

1964精密工アル



コンパ

1966化学工卒アル



ユミちゃんも一緒に

1966機械工卒アル



皆でマージャン

1966電子工卒アル



雲と波と野郎達

1966機械工卒アル